補訂新體國語教ノ

375.9
Fu10
資料室

42068
教科書文庫
4
810
41 1912
200030
2357

資料室

375.9
Fu10

文部省檢定濟
大正元年十月九日　中學校國語科用

文學博士　藤岡作太郎編纂
文學博士　藤井乙男補訂

補訂 新體國語教本

東京　開成館藏版

廣島文理教
34505

目次

卷五目次

一　忠君愛國……一
二　千里の春……七
三　京都……一一
四　春の歌……一九
五　旅行の古今……二〇
六　筑波艦のスエズ航行……二六
七　夜の海……三一
八　兒島高德……三四
九　國花……三七

贈
本田司郎
26年4月31日

一〇 櫻井の驛……四三
一一 湊川合戰……四八
一二 成功と失敗……五三
一三 北畠親房……五七
一四 いにしへの文……六一
一五 自治の意……六二
一六 朝顏を贈る……六六
一七 暴風雨……六八
一八 果物……七一
一九 十年前 その一……七六
二〇 十年前 その二……八二

二一 華嚴瀑……八四
二二 渡邊崋山……八七
二三 一歩にても……九二
二四 人生は汽車……九七
二五 名家の言……九九
二六 口腹耳目の箴……一〇三
二七 新羅三郎……一〇五
二八 浮島原の對面……一〇七
二九 源平二烈士……一一一
三〇 關東武士……一一六
三一 海と岩……一二一

三二　破船……三三
三三　古戰場……三五
三四　本多重次……三七

大阪帝國大學圖書之印

補訂 新體國語教本 巻五

一　忠君愛國

「開闢以來君臣の分定まれり」とは、有史以前からわが民族の腦裏に浸み渡つた思想で、天孫の皇裔が代々帝位を繼ぎたまひ、臣下萬民はこれに服從せねばならぬものである事は、動かすことのできない國風である。畏くも天皇は、現つ御神とあらせられて、高御座はるかに人間の上にゐさせられるのである。カミといふ語は、神、上、髮に通ずる語で、すべて上にあるものをいふ。このカミ

和氣清麿が宇佐八幡宮より賜はりたる神勅の言

動かす

現つ御神

高御座

公（おほやけ）
小家（こや）
仰ぐ
翼賛（よくさん）

といふ思想は、太古から今日まで、常に我等日本人が皇室に對して抱き奉るもので、同族中から成り上つた帝王に支配される外國臣民の感想とは、大いに差別がある。

されど國民が皇室に對するのは、神として恐れ畏み奉るばかりでない。皇室を公（おほやけ）といふのは大家の義で、これに對して我等は小家（こや）である。卽ち皇室は我等の本家であらせられるといふ思想で、この中には親愛の意味がある。よのつねの統治者と被治者との間柄ではなく、心の底から上下互に親睦するのである。八百萬の神が天孫を君と仰いで、その事業を翼賛するのは、これを恐れて義理づくに服從して居るのではない。恐多いが、大本家の統領として尊敬して居るのである、親子の關係が成り立つて居るのである。親の命令は聽かねばならず、親の心は喜ばせねばならない。何を得るのも親の手からするのは嬉しいものである。親子の愛情は人の至情卽ちマゴコロで、マゴコロは卽ち忠である。忠といふ漢語を國語に譯すればマメゴコロで、畢竟マゴコロである。忠といひ孝といふのも、わが國では別物でない。

聽（きこ）
喜ぶ
尊ぶ
睦ぶ

たのマゴコロを以て皇室に對するのが、わが國民の習である。神と尊び、神と畏れ、親と賴み、親と睦ぶから、勅命とあれば、いかなる事にも從ひ、いかなる事をも行ふ。い

元寇（冦）
驚かす
惜しむ
家來

やいやながらするのではなく、有り難がりてするのである。大和魂といふのもこのマゴコロで、元寇の時に大敵を逐ひ拂つたのもこのマゴコロである。このマゴコロこそ、擧國一致以て外敵に當るといふ精神、皇室を保護し、皇國を維持しようとする精神で、困難のある毎に現れて、世界を驚かす事業をするのである。

マゴコロ卽ち皇室に對する忠といふ思想は、武家時代には主從の連鎖となり、武士道の精髓となつた。卽ち己の主人はゝマゴコロを以て仕へて身命を惜しまず、事ある時には馬前に討死するのが、家來たるものの本分である。この武士道はもと武士の守らねばならぬもの

擴まる
倒す
陪臣
廢る
天朝直參

であつて、これを以て町人以下を律することゝなかつたが、その思想はまたいつしか町人はも、男はも、女はも、一般國民の間に擴まつた。されば奉公といふのも、初は朝廷に對する語であつたが、遂には通常の雇人をも奉公人といふやうになつた。

一旦主從の上に移された忠の解釋は、明治の維新と共に古に復つて、皇室に對するものと限られることになつた。否、この解釋の復古が德川幕府を倒して、明治の維新を成したのである。維新後は士農工商皆平等になつて、國民一般に兵役に就くこととなつた。陪臣、陪々臣の制度は廢れて、いづれも天朝直參の臣となつた。久しく

犧牲的精神

武家で養成した武士道の精神は、天朝に對してのみ捧げられる事となつた。かうして町人百姓の間にまで行き渡つた國民の思想は、今はその犧牲的精神を以て、國家の爲に身命を抛つ

抛つ

にも勝ち、露西亞をも破つたのである。

凱旋塔

伯林の凱旋路の一端に、高さ數十丈の凱旋塔があつて、その上に金色の燦爛たるゲルマニアの女神の像がある。この女神は獨逸の國家を代表する爲に作られ、空想的人物である。これと等しく、英國ではブリタニカ、佛國ではガリアといふ空想的人物を設けてある。政體が幾たびも變り、王室が屢交替する外國で古來の歴史を

代表

空想的人物

設く

國家的觀念

懷はせ、國家的觀念を養はせる爲には、かやうのものを假設するより外に途がないのであらう。たゞこが日本では、國土と皇室とは開闢以來離れることのできぬもので、國の爲、家の爲といふことは、同一の意味に解釋される。「朕は卽ち國家なり。」とは、わが國の天皇であつて始めて宣ふことのできる辭である。

（國民性十論による）

フランス王ルイ十四世の言

二　千里の春

浮ぶ

藍

春晴千里、山また山、水また水、近き水は澄みて山の緑を浮べ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。この間に一線を引き行くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海

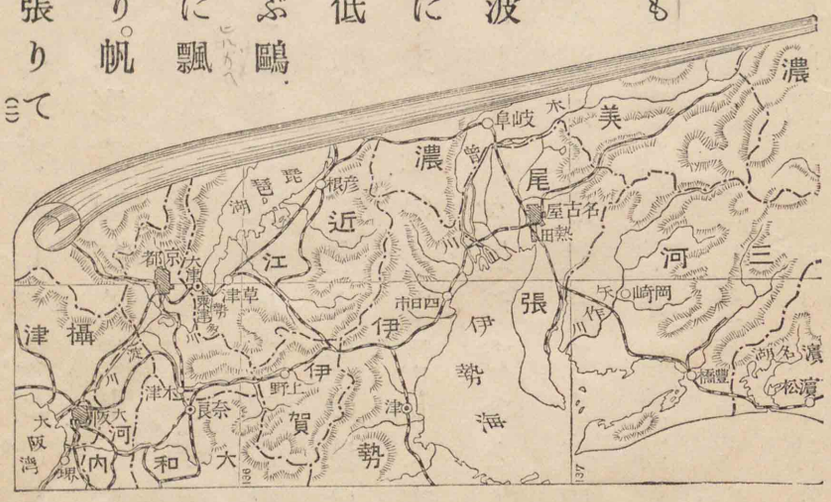
消ゆ
見ゆ
青し
紅
慰む

道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客が鉛筆と紙とを手にして

出で行く舟あり、艪をゆやつりて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて、探れども見えず。松青きところ、色どりそふるに桃の紅を以てす。自然はこの美をおくりて旅客を慰め、詩人はその美を詠じて春に

畫
七砲臺は品川沖にあり
碎く
末
造化の妙技

寫し出すは、歌か、詩か、そもそも畫か。七砲臺邊、波おだやかにして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに似たり。帆をなかば張りて



謝せんとす。藤澤の野、山北の谷、人毎に唯美しと叫ぶ。三保の松原けむりわたりて、春は畫の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末にうきたつ雲、何ものか造化の妙技に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆は

動かんともせず、杳として見とめられたるは伊豆なるべし。富士は水彩畫の如くにして、窓の右に立ち、又左にあらはる。

あらはる

平原十里、麥は綠に、菜種は黃なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せそめたり。田夫は金の鯱を指して妻と語り、行商は旅宿の可否を評して、わゞ好む方へと人を勸む。

見す　勸む

彥根去り、草津來り、煙は早くも勢田川に橫たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡も今は何れのところぞ、問へども答へず。霞に疊まるゝ遠近の山、或は淡く、或は濃く、鴉の浦風波に眠りて、粟津の松原ひとり昔に似

朝日將軍は源義仲　答ふ

たり。

迎ふ

東寺の塔は睦ましく吾を迎へて立ち、賀茂川の水は親しげに吾を迎へて歌ふ。なつかしき舊友と語るに似たるは、いつも京都に着きし時の心地なり。（大和田建樹）

三　京都

出づ

平生閑靜なる田舍に住む人は、時々繁忙なる都會に出でて、人生活動の樣を見習ふべし。これに反して、東京、大阪などに家を構ふる人は、暇ある折は平和なる自然の懷に入りて、勞を慰め氣を新にすべし。されど明媚なる山川も、唯名所といふだけにては物足らず、古來の歷史

構ふ　明媚

障子を開き、遙やゝ開け

に關係深き舊跡として見てこそ、景を愛し古を懷ひて、旅行の樂これに過ぎたるはなかるべけれ。風光と由緒と兼ね備れるわが國第一の勝地は、京都なり。

京都の地形は座敷の南一面の障子を開きたるが如し。三方は山の襖を立て廻らし、四隅の柱として、前に桃山と天王山とあり、後に比叡山と愛宕山とあり。淀川、巨椋池を前庭の泉水とすれば、男山を築山に譬へん。疊の緣とも見ゆるは、東に賀茂川、西に桂川、ともに水色澄明にして、底の砂も數ふべし。一方の襖には松の緑目さむるばかりなる東山を濃く描き、一方には淡く西山を寫して、ほのかに嵐山の櫻を見せたり。山色水光雨に奇に、晴

譬ふ

數ふ

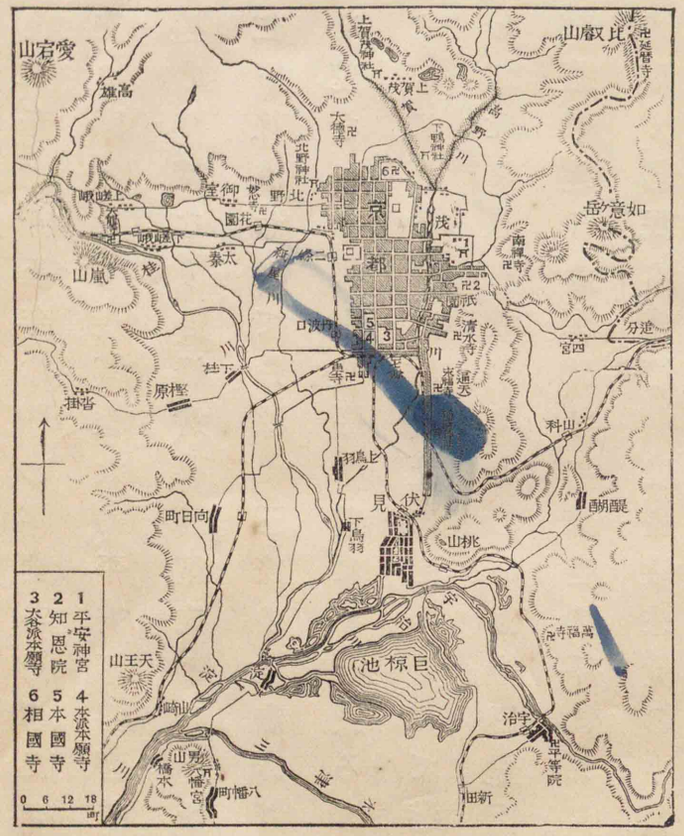
一として佳ならざるなし

うたゝ

延暦十三年は一四五四年

奠都

に好く、四季の往來、朝夕の變化、一として佳ならざるなく、嵯峨、御室の花、通天、高雄の紅葉とり〴〵に面白ければ、遊人うたゝ興に入りて歌を思ふ。



延暦十三年、桓武天皇はじめてゝに奠都したまひ、それよりこの地は平安京と稱せ

應仁元年は二一二七年

荒涼
内侍所
紫宸殿
褰ぐ
途や〻開け、障子を開き
安堵
慶長元年は二一五六年
大嘗祭

られ、千七十五年の間、わが國の帝都たり。都制は唐の長安に則とりて規模雄大に、平安朝四百年は實に京都最盛の時期なりき。鎌倉幕府創立このかた、漸々衰微し、應仁以後はわけて荒涼に、三條の大橋より内侍所の燈光を望むべし。又紫宸殿の前に茶を賣るものあり、兒童もこゝに寄り合ひ、緣の上に土をこねて遊ぶに、御簾を褰げて叱る人もなかりきといふ。織田、豐臣の世に至りて恢復の途やゝ開け、特に秀吉の手によりて市區の改正も成り、居民も安堵し、慶長以來世の中の泰平なるに從ひて、市街は益〻繁昌せり。明治二年、皇居は東京に遷されしが、卽位の禮及び大嘗祭はこの後もなほこの地にて

潰ゆ
考ふ
廣闊
缺く
藤原定家、約七百年前の歌人

行はせたまふといふ。

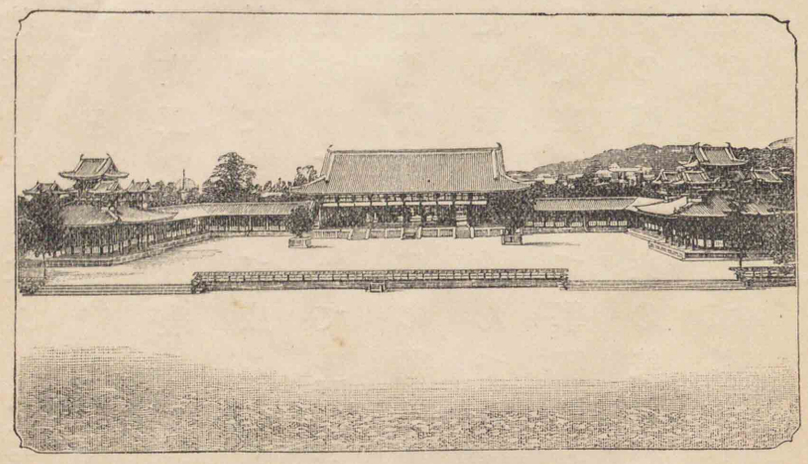
既往に鑑みるに、この地は封建の世の要害にあらず、古來京を守りて成功〻たるものなしと稱す。木曾義仲が宇治、勢多に潰えたるが如き、明智光秀が山崎に敗れたるが如き、攻守の勢おのづから元氣を異にするが爲なるべしといへども、その險隘の地にあらざるは勿論なり。將來を考ふるに、地勢甚だ廣闊ならず、漕運の便をさへ缺けば、大いなる工業、盛んなる商業のこゝに根ざすべしとも思はれず。唯古代の追懷の饒かなるに、この地の値は存せ。わが國の歷史の大半は卽ち京都の歷史なり。裏の畠もそゞろあるきの野路も、貫之、定家が歌の跡、

左顧右盻
進む
巨刹。（殺、利。）
賽人

源氏、平家がいくさの場なり。そことも知らず亡びたる古跡も少からねど、名家の遺功の今に殘れるもなほ多く、左顧右盻飽くことを知らず。昔獨逸の文豪ゲーテは伊太利を巡遊してより、著しくうの思想を進めたりといふ、わが國の馬琴が小説に名を著せるも、京阪漫遊の後なることを思ふべし。日本の京都は歐洲の伊太利ぞかし。

大社巨刹の多きは京都附近の特色なり。北には賀茂川に沿ひて、下鴨、上賀茂の二社あり、南には男山に據りて石清水八幡宮あり。平安神宮は桓武天皇を祀りて碧瓦丹楹目を驚かし、賽人の最も多きは祇園、北野に伏見の

四明は比叡山中の最高峰
隱る
望む
伽藍



平安神宮

稻荷と聞く。天台宗には叡山の延暦寺、四明の陰に隱れて見えず、眞言宗の東寺は、高塔巍然として汽車の窓よりも望むべし。淨土宗の知恩院、眞宗の兩本願寺、日蓮宗の本國寺、臨濟宗の南禪、相國、妙心、大德、天龍、東福等の諸寺、黃檗宗の萬福寺など、いづれも堂々たる伽藍なり。清水寺は風景の美しきによりて、平等院は

淵叢
細緻
刮目

建築の古きによりて著る。

されど京都は啻に古代の遺跡に富みたるのみならず、美術、工藝の淵叢として亦全國に冠たり。げにや、時代の錬磨によりて成るべき細緻の手工は、この地の如き歴史ありて始めて望むべし清水の磁器、西陣の織物、友禪、刺繍、扇子、短册の類は他に匹敵するものなく、繪畫はまた東京と相竝んで互に優劣を爭ふ。已に京都帝國大學の設立ありて、學問においても一方の中心となりぬ。既往の盛は將來の榮を促すべく、千年の舊都が今後の發達、蓋し刮目して見るべきものあらん。

いたくな降りそ。
あま
にほひいづ
山のかひ

四　春の歌

吾が宿の梅の花咲けり、春雨は
いたくな降りそ、散らまくも惜し。　（源實朝）

もしほやく難波の浦の八重霞、
一重はあまのしわざなりけり。　（僧契沖）

うらゝとのどけき春の心より、
よゝひ出でたる山櫻かな。　（賀茂眞淵）

櫻花さきにけらしな、足曳乃
山のかひより見ゆる白雲。　（紀貫之）

あり
寢ぬ
王侯
休む
たとひ（たとへ）

五　旅行の古今

旅行ほど面白きものゝあらじ。岩根こゞしき山路をたどりてゝ、樵夫どもの物語に疲をいやし、暴浪よする濱邊にさまよひてゝ、舟子等の歌に苦しさを忘る。都會に出でてゝ大厦高樓に寢ね、美酒佳肴に飽きて、一日の王侯となることもあれど、邊鄙に赴きてゝ、茅屋に雨露を凌ぎて、松風の聲、暴浪の音に夢を驚かされ、麥飯に飢を支へても、終日の勞を休むる能はざることあり。境遇日日に變りて、見聞時々に同じからず。珍しきを好み新なるを喜ぶは人情の常なれば、たとひ苦しくつらきことゝありとも、今日の人にして旅行を好まざる者ゝあらざるべし。

夏の蟲氷を疑ふ
うべなふ
行きくる
得

されどいにしへは旅行を憂きことの限といへり。今にしてこれを思へば、夏の蟲の氷を疑ふが如き感なきよあらねど、當時旅行のいかに困難なりしかを聞きたらんには、誰かこれをうべなはざらん。さがしき山にも路なく、深き川にも橋なく、大方は人家もいとまばらゝゝて、宿驛も遙に隔りたれば、行きくれて宿りすべき屋なき時には、木の下蔭に臥し、或は草引き結びて眠らざるを得ざりしことも、その常なりき。且また猛獸毒蛇の憂、山賊海賊の恐ありしのみならず、飢を凌ぐべきよすが

甑
持たでは
費す
旅はうきもの

古代の旅装

だになきこともありしかば、米をも擔ひ、甑をも持たではかなはざりけりぞ。されば能因法師は「都をば霞とともにたちしかど、秋風ぞ吹く白河の關。」と詠み、紀貫之朝臣は土佐より都に歸るまだに五十日餘を費したりき。その困難想ふべく、旅はうきものといひ

宜、うべなふ
參覲交替
開く
比ぶ
こよなき
險し
大御代

しも宜なるかな。

江戸時代となりては、參覲交替といふことありて、海内の諸侯皆江戸に往來せ〜かば、山にも路を開き、河にも渡〜を設け〜など、いに〜へに比べては、こよなき便を得〜のど、なほ山路は險〜くして歩行に艱み、廣き河には橋もなかりしゃば、少し水の増す折には、たやすく渡ること能はずして、徒らに減水の時を待つのみなりきとぞ。今にしてこれを想へば、夢の如きかな。

明治の大御代となりてよりは、山にも平かなる路をつくりて車を通ぢしめ、河にも大いなる橋を渡して往來の便を計れり。さかのみならず陸には一日に百里を走

樂しき苦しさ

うつろひかはる

紀行の變遷經

る汽車あり、海には難破の憂なき汽船ありて、朝には上野の花を眺めて、夕には松島の月を賞することもいとやすくなりぬ。啻に往來の便かくの如く宜しくなりしのみならず、到る處に旅舍の設あれば、糧をもたらす煩もなく、木蔭に宿り草を枕とする困難もなし。されば人皆旅行の樂しきを知りて、苦しさを知らず。變遷は世の常といひながら、かくばかり古今の差別の甚だしきものはあらざるべし。

さて旅行の樣のうつろひゝはれるにつけて、想ひ出さるゝは紀行の變遷なりけり。貫之朝臣ゞ土佐日記を書きゝより、紀行といふもの代々を經ていと多くなり

交ふ詞藻

開く實學長く

氣候、王侯

たれど、大方は歌を交へ文を飾りて、その詞藻を誇り、或はおのれ一人の心やりにせるのみぞ多かりし。今これを見れば文學としては面白く、且いにしへの驛路の有樣、人情、風俗、政治などの片端を窺ふ便とはなれど、他に讀者を益することもなし。然るに江戸時代となりてよりは、一般に學問も開けしかば、實學に志し、兼ねて作文に長けたりし者も、多く出でたり。隨うてその紀行を見るに、文學上の名勝佳區は言ふも更なり、英雄豪傑の興亡せしところ、孝子義僕の出でし土地など、遍く探り委しく尋ね、人情風俗の差別、氣候産物等の異同に至るまで詳に考へ記したるもののもあり。

文運隆盛生る
冒す
跋渉
僻地荒陬
遺聞
濫用

今日の青年は、幸にしてこの文運隆盛の御代に生れ、十分なる教育を受けたるものなれば、古人の困難を冒しし、用意の周到なりしことなどを追想して、名山大川を跋渉して辛酸を嘗め、心膽を練り、或は僻地荒陬を巡りて人情風俗を察し、舊跡遺聞を探り、さて有益なる紀行を作りて世用を爲さんことを勉むべし。文明の利器を濫用して、安逸のみを事とする者は、古人に對しても愧づかしからずや。

（高津鍬三郎）

筑波艦は明治四十年四月通航せり、本文はその乘組士官の日誌の一節

六　筑波艦のスエズ航行

蘇士運河は、佛國の事業家ファーヂナン＝ヅ＝レセップス氏が

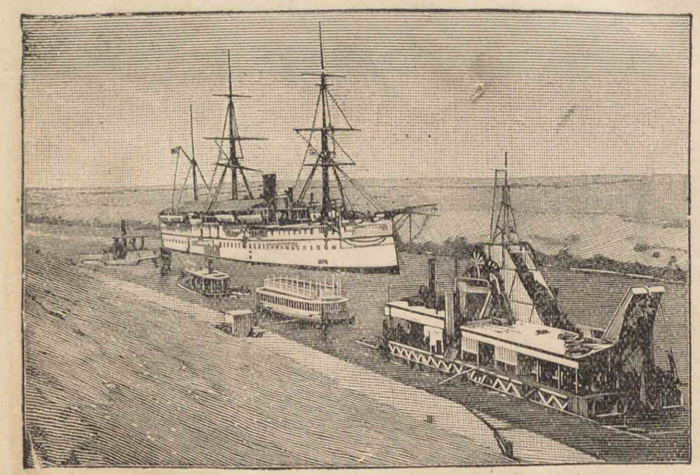
完成す
空前
乃至
通航す
開鑿す
水先人
運轉す

夙く堅忍不拔の志を抱き、十箇年の星霜を經、二億圓の資金を抛ち、西暦一八六九年に至りて始めて完成せしめたる空前の大工事なり。南蘇士より北ポート＝サイドまで蜿蜒たる八十七浬の中に、ビッター、チムサー、バラー、メンザレーの四湖を含み、幅三百二十呎乃至三百三十呎、深さ二十九呎ありて、能く吃水二十七呎の巨船を通航せしむ。この大運河一たび開鑿せられてより、歐亞の水路全く連り、東西兩洋比隣の如く、喜望峰は空しくその名をのみ留むるに至れり。

四月七日午前九時過、艦は水先人を載せ、運河會社の汽艇に曳かれ、又自ら汽機を運轉し、徐航して運河に入る。

會す
配す
瞰下せば（瞰下さば）
誤らば（誤れば）
休す

河の兩岸は盡く砂礫にして、崩壞の虞あれば、通航の速力を五浬三分一以下に限り、兩船相會せん時、その一を避けしめん爲、諸處に幅を廣めて停船場を設け、且常に數多の浚渫船を配して、河底を浚へしむ。甲板より水面を瞰下せば、艦幅河を塞ぎて、餘す所僅に數呎、若し一歩を誤らば、萬事立ちどころに休すべし。或人曰く、「橋の欄干に自轉車を驅ると孰れぞ」と。艦長及



スエズ運河

察す
渺茫
來往す
倦厭
回望す
聯想

び航海長の苦心察すべきなり。兩岸の平地はアラビヤ及びサハラの大沙漠の終る所にして、渺茫天に連り、唯目を遮るものは、停船場附近及び左岸の點々たる綠叢と、駱駝に跨りて來往する旅客とのみ。行けども〳〵途上の風景何の變化もなく、漸く倦厭の情を催し來る。然れども又徐ろに四方を回望すれば、種々の聯想の起らざるにしもあらず。彼處に茂れる綠叢は、工事の初、ナイル河上より導かれて數萬の生命を繫ぎし、有名なる淡水河の岸を覆へるなり。此處に留れる駱駝の群は所謂隊商にして、太古の文明はこの運河の兩側よりまづかれ等の肉峯の上に乘りて、これ等の沙漠を横ぎり、以

傳播す
追懷す
感興
投錨す
寄泊す
點ず
到着す

て八方に傳播したるなるべし。

かくの如く追懷すれば、レセップスの人から、開鑿當時の勞役の光景四千年前の歴史等、交〻眼前に現れて、感興おのづから禁じ難し。航行約七時間にしてチムサー湖に入り、午後四時半、左岸のイスマイリア港に投錨す。この地は運河の中央に位せる一小都會にして、海員の住居及び旅宿その大部分を占め、夜航を避けんとする船舶の寄泊する所なり。夜間船首に探海燈を點じて通航する船舶また多し。

翌八日午前五時三十分、再び水先人を載せて運河に入り、午後二時、河口なるポートサイドに到着し、運河會社の對岸に繫留す。運河通航料は登簿一噸數毎に七法七五にして、本艦は曳船料、護衛船料、ポートサイド碇泊料を合せて、約四萬七千六百法を支拂へり。

繫留す
一法は約四十錢

明治三十五年八月の記事

七　夜の海

闇を縫うて
さながら
冥途

四日午後四時、わが交通丸は敦賀を解纜す。夜九時、船橋の上に立つ。船は今闇を縫うて加州沖を進む。夜の莊嚴は海上に在りて始めて見るべし。

海と空と一樣に黑き中を航せるわが船は、さながら冥途を辿れる如し。仰げば、前面に當りて、巨人乃如く眞黑に立てる檣と、これを支ふる數條の綱とを見る。檣の中

撒、(撒、徹)
闌干として繁し
點々として
折れ返り卷き返る
燦として

央前面に掲げられたる燈光は、朧に前部の帆綱を照して、ことさらに檣を黑からしむ。無數の星は紅玉を撒きたるが如く、闌干として特に檣の上に繁し。銀河右舷の方北極星の右に起りて、斜に船を横ぎり、左舷の方船尾に當りて、低く海に落つ。

漁火あり、遠近に明滅す。或は點々として散じ、或は列をなして横たはる、加賀、能登の沖に烏賊を漁れるなり。俯して船腹の波間を見ずや、こゝにも亦思ひかけぬ美觀を見出すべし。何ぞ、燐光の發散是なり。船體に碎かるゝ海面激して白波を揚げ、白波の折れ返り卷き返る時、その外緣燦として燐光を發す。燐光は半月形を描きて擴

則、(卽、乃)
滔々として黝冥
凄じ寂寞として

がり、擴がりて則ち消ゆ。明また滅、時にはその光船橋に及び、海底もまた見え透くかと疑はる。

船尾に立ちて船の過ぎ行く跡を見れば、暗黑のうち眞白に湧き返る潮は、滔々として瀑流の如く、遠く黝冥の天に向つて注ぎ、大煙突より吹き下す黑煙は、略これと平行して、又遙に黝冥の海に向つて下り、こゝに白黑二條の凄じき流は、寂寞として死せるが如き大海に鬪ふ。更にこの二條の流を隔つること左右各七八間にして、燐光の消え且生ずるを見る時は、人をして眞に人世の光景にあらざるかを疑はしむ。

北韃靼海峽より吹き來る長風、驀地にわが衣髪を掠め、

ほのぐらし　黒し
冥々として　多し
落さる。
默止す

動もすれば船橋の上より吾を吹き落さんとす。橋上はほのぐらくして、唯船長と運轉手との黑き影が時に相呼應するを聞く。何等の寂寞ぞ。天地冥々として眠れる中を、わが船獨り微光を載せて走る。暗中の船、何ぞ凄絶にしてまた詩趣多きや。

（日本海周遊記）

八　兒島高德

その頃、備前國に兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、御方に參りて義兵を擧げしが、事未だ成らざるさきに、笠置も落され、楠木も自害したりと聞にしかば、力を失ひて默止しけるが、主上隱岐國へ

遷さる。
志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁（論語）
見義不爲無勇也（論語）
爲
同ず
走らす。見さす、（見しむ。見す。）

遷されさせ給ふと聞きて、二心なき一族どもを集めて、評定しけるは、『志士仁人は生を求めて以て仁を害する事なく、身を殺して以て仁を成す事あり。』と云へり。義を見て爲ざるは勇なきなり。いざや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ取り奉りて大軍を興し、たとひ屍を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へん。」と申しければ、心ある一族ども皆この義に同ず。さらば路次の難所に相待ちて、その隙を覗ふべしとて、備前と播磨との界なる舟坂山の巔に隱れ伏し、今やと待ちたりける。

臨幸餘りに遲かりければ、人を走らせてこれを見さするに、警固の武士山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道

奉りける間
究竟
すぢかひ。
院庄は美作國にあり、津山の西一里半
達せばや
勾踐は支那春秋時代の越の君、范蠡はこれを佐けて吳を滅したる功臣

にかゝり、遷幸をなし奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らんとて、三石山よりすぢかひに、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂に着きたりければ、主上はや院庄に入らせ給ひぬと申しける間、力なくこゝよりちり〳〵になりけるが、せめてもこの所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して時分を覗ひけり。然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に、大きなる櫻の木ありけるを押削りて、大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫レ空ニ勾踐一、　時非レ無ニ范蠡一。

たるやらん
龍顏
思ひ咎む
淋しからん。愛せず。

御警固の武士ども朝にこれを見つけて、何事を如何なる者が書きたるやらんとて、讀みゝねて、乃ち上聞に達してけり。主上は軈て詩の意を御覺りありて、龍顏殊に御快く笑はせ給へども、武士どもは敢へてその來歷を知らず、思ひ咎むる事もなかりけり。

（太平記）

九　國花

花なくば、世の中いかに淋しからん。花を愛せぬ人はなけれども、國によりて好も違へば、愛する花も異なり。その種々の中に、國民がわけて尊重するもの淺國花と名づくべし。これは一般の民が賞する故にいふもあり、王

あらず。

諺

痛まず。

丹誠

主權の爭奪

家の紋章なる故にいふもあり、或はいづれをさしてそれといふべき花のなき國もあれば、國旗の如く、國花は國々に定まりてあるにはあらず。

わが國の國花は櫻なり。一言に花といへば、卽ち櫻のことにて古き諺にも、「花は櫻に、人は武士。」といへり。菊も亦貴ばる。百花に後れて霜にも痛まぬ操や、培養する人の丹誠に從ひて樣々に變化する事など、愛賞の種なるべきが、皇室の御紋に用ひらるゝこと、この花の第一の値なるべし。

支那は面積曠遠、土地によりて人情の相違多く、又主權の爭奪數々にして、これと共に風俗も移れば、定まりたる

蘭有國香（左傳）

與善人居、如入芝蘭之室（孔子家語）

貴重せられき。

傳へいふ

遊びき。

貶す

作らしめき。

國花といふも擧げ難し。上古は「蘭に國香あり。」といひ、「善人と居るは芝蘭の室に入るが如し。」ともいひたれば、その貴重せられしこと想ふべし。唐朝に至りては、牡丹殊に盛んにして、これを國色と稱す。傳へいふ、則天武后後苑に遊びしに、百花皆開きて牡丹獨り遲れたり、よりてこれを洛陽に貶す。これより洛陽は牡丹を以て天下に冠たりと。玄宗皇帝が沈香亭にこの花を賞し、李白をして詩を作らしめしも、世に知られたる話なり。梅も支那人が古今に通じて深く愛したる花なり。印度人の最も尊重するは蓮花なるべし。

西洋人は一般に薔薇を愛して、花の女王といふ。その由

常磐樹

從うて

許さず

月桂

來は極めて久しく、古代のギリシヤ人も早くこれを賞したり。されどこの舊き文明國民が深く貴べるも、月桂、橄欖等の常磐樹なり。月桂はアポローン神の樹、橄欖はアテーナー神の樹にして、ギリシヤ人は深くこの二神を尊崇すれば、從うてこれらの樹をも重んじて、祭祀の用の外は漫りに伐ることを許さず。二樹共に勝利の記章にして、又平和の標號なり。オリンピアの競技に勝ちたる者は、月桂の冠を戴き、戰爭に

月桂　橄欖

習なりき

異ならず

欽定

出でき

西暦一四五五年より一四八五年に至る間、二家の間に王位相續の爭ありき

戰ひき

傳說

攻めき

かけん

敗れたる者が和睦を求むる時には橄欖の枝を携へ來りて勝者に捧ぐる習なりき。ローマの習もこれに異ならず。アポローンはまた詩の神なれば、名譽の詩人に月桂冠を與ふることとあり、英國にて欽定の詩人を桂冠詩宗と稱ふるも、この舊習に出でしなり。

イングランドは薔薇をその國の紋とす。嘗てヨーク家とランカスター家と戰ひし時、白と紅との薔薇を各自の家の紋としたれば、世にこの役を薔薇の役といへり。スコットランドは薊を國花とす。傳說にいふ、昔デンマーク人がこの國を攻めし時、夜討をかけんとして、まづ斥候を放つ。斥候過つて薊を踐み、覺えず大聲を放ちたる

逆襲

持たせ。

ならん。

つめくさ　矢車菊

フランスの紋章は或は百合なりといひ、或は菖蒲なりといふ。傳へいふ、古代のフランク人の習に、卽位の式には、帝王を楯に乘せ、笏のかはりに菖蒲の花を持たせしことあり。これより王室の紋として用ひられたるならんと。ドイツの國花は矢車菊なり。その國にはこの草野に、スコットランド人は目を覺し、敵を逆襲して大捷を得たり。薊の貴ばるるはこれが爲なりと。アイルランドの國花はつめくさなり。

愛し。

ルイゼはナポレオン一世の時代のプロシヤ王フレデリキ＝ウヰリアム三世の后

生して、種々の色の花を開く。プロシヤの皇后ルイゼが深くこれを愛せし緣によりて、ブランデンブルグ家にては今にこれを大切にするなりといふ。アメリカ、ロシヤには國花といふべきものなし。

退きぬ。

内裏

御さわぎ。

はうぐわん（判官）は檢非違使尉のこと

一〇　櫻井の驛

尊氏、直義大勢を率して上洛せんとする間、要害の地に於て防ぎ戰はんために、兵庫に引き退きぬる由、義貞早馬を進らせて、内裏に奏聞ありければ、主上大いに御さわぎありて、楠木判官正成を召されて「急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて合戰を致すべし。」と仰せ下され

けり。

正成畏つて奏しけるは、「尊氏已に筑紫九國の勢を率して上洛し候ふなきば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗りたる大勢に駈け合ひて、尋常の如くに合戰を致し候はば、御方も決定打負け候はんと覺え候ふなれば、義貞をも唯京都へ召し候うて、前の如く山門へ臨幸なり候ふべし。正成も河内へ罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧を疲らかし候ふ程ならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日々に隨つて馳せ集り候ふべし。その時に當つて義貞は山門より推

候ふらん。

決定

候うて

搦手（追手）

了簡

思はんず。恥づ。

とてもかくても

僉議

參議藤原清忠

節度使

し寄せられ、正成は搦手にて攻め上り候はば、朝敵を一戰に滅すべしと覺え候ふ。義貞も定めてこの了簡に候はんが、路次にて一軍もせざらんは、無下にいひがひなく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候ふ。合戰はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。能く〳〵遠慮を運らされて公議を定めらるべきにて候ふ。」と申しけり。

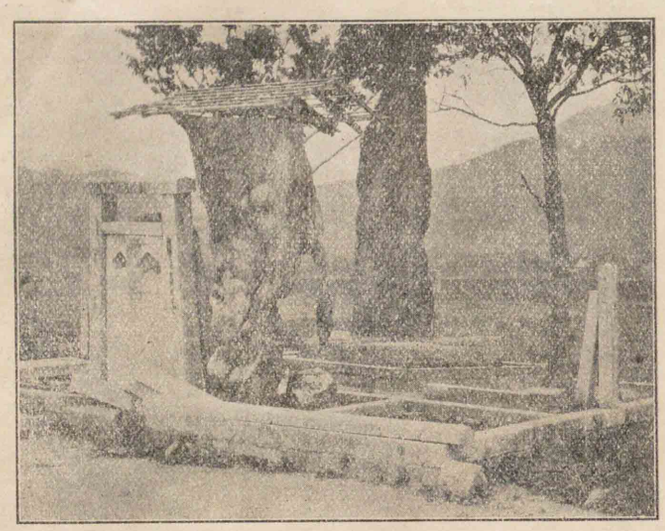
誠に軍旅の事は兵に讓られたと、諸卿僉議ありけるに、坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申す所もその謂れありといへども、征伐のために差下されたる節度使未だ戰を爲さざる前に、帝都を捨てて一年の内に二度ま

よも
過ぎじ。
攻め靡く
鈇鉞
延元元年（一九九六）の事

で山門へ臨幸ならん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ所なり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を從へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戰の始より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻め靡けずといふ事なし。これ全く武略のすぐれたる所には非ず、唯聖運の天に叶へる故なり。然れば唯戰を帝都の外に決して、敵を鈇鉞の下に滅さん事、何の子細かあるべき。唯時を替へず罷り下るべし。」とぞ仰せ出されける。正成この上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

嫡子
遺す
庭訓
遺す、遺す
敎ふ
餘りぬ。

正成これを最期の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井の宿より河内へ還し遣すとて、庭訓を遺しけるは、「獅子、子を生みて三日を經たる時、數千丈の石壁よりこれを投ぐ。その子、獅子の機分あれば、敎へざるに、中より跳ね返りて死せずと云へり。まして汝既に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、わが敎



櫻井の驛址

今生

聞きぬ。

死に殘る

養由基は支那春秋時代の楚の人にして、射を善くし、紀信は漢の高祖の臣にして、高祖に代りて滎陽に死せり

ならんず

別れぬ。

誠に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ん事これを限と思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず尊氏の代に成らんと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助らんが爲に、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に殘つてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣く〳〵申し含めて、各〻東西へ別れまゐり。（太平記）

一一　湊川合戰

申しけり

隔てたり

左馬頭は足利直義

敵なり

組んで

合はぬ敵

打つて

合うて

楠木判官正成、舍弟帶刀正季に向つて申しけるは、「敵前後を遮りて、御方は陣を隔てたり、今は遁れぬ所と覺ゆるぞ。いざやまづ前なる敵を一ちらし追ひ捲りて、後ろなる敵と戰はん。」と申しければ、正季「然るべく覺え候ふ。」と同じて、七百餘騎を前後に立て、大勢の中へぞ駈け入りける。左馬頭の兵ども菊水の旗ぢ見て、好き敵なりと思ひければ、取籠めてこれを討たんとしけれども、正成、正季東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、好き敵と見るをば、馳せ竝べて組んで落ちては首を取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つて駈け散す。正成と正季と七度合うて七度分る、その心偏に左馬頭に近づき、組

乘りたりけり

返し合す
飛んで
取り延ぶ
斬つて
落ち延ぶ
追つ立つ
下知

んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎楠木が五千餘騎に駈け靡けられ、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義の乘りたりける馬鏃を蹄に踏み立てて、右の足を引きける間、楠木が勢に追ひ詰められて、已に討たれんと見えける所に、藥師寺十郎次郎只一騎蓮池の堤にて返し合せて、馬より飛んで下り、二尺五寸の小長刀の鐓を取り延べて、懸る敵をはね倒し〳〵、七八騎が程斬つて落しけり。その間に、直義は馬を乘り替へて、はる〳〵落ち延びたりけり。

左馬頭楠木に追つ立てられて引退くを、尊氏見て「新手を入れ替へて、直義討たすな。」と下知しければ、吉良、石堂、

取つて

戰うて
當つて
在家

高、上杉の人々六千餘騎にて湊川の東へ駈け出で、跡を切らんとぞ取卷きける。正成、正季復取つて返して、この勢に懸り、打ち違へては殺し、駈け入りては組んで落ち、三時が間に十六度まで戰ひけるに、その勢次第々々に滅びて、僅に七十三騎にぞなりにける。楠木京を出でしより、世の中の事今はこれまでと思ふ所存ありければ、一足も引かず戰うて、機已に疲れければ、湊川の北に當つて、在家

楠　水　正　成

負うたり

の一村にありける中に走り入りて、腹を切らん爲に鎧を脱ぎて、わが身を見るに、切創十一箇所までぞ負うたりける。この外七十二人の者どもも皆五箇所、三箇所の創を被らぬ者はなかりけり。

打笑つて

正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、「抑、最期の一念に由つて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なる。」と問ひければ、正季からく〳〵と打笑つて、「七生まで唯同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ。」と申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、「罪業深き惡念なれども、吾も斯樣に思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、この本懷を達せん。」と契りて、兄弟と

よに嬉しげ
思ふなり

臥しにけり

もに刺し違へて、同じ枕に臥しにけり。橋本八郎正員、宇佐美河内守正安を始として、宗徒の一族十六人相從ふ兵五十餘人思ひ〳〵に竝び居て、一度に腹をぞ切りたりける。

宗徒

（太平記）

一二　成功と失敗

なつた

耳障り
俄分限

成功といふ熟語は、近頃の流行語となつゝ樣であるが、如何にも耳障りな言葉である。たま〳〵世間の俄分限になつゝ人があるゝ、或は一朝にして顯要の地位に昇進しゝ人がある時には、その人は成功したとて之を賞し、又祖先累代の素封家が、事業に失敗して産を失つた

素封家

退いて布衣
執着
置いて
論定したら
馴致
貴い
贏（贏弱）
尚ぶなら
論じよう

とゝ、或は要路の有司が、その職を退いて布衣の昔に復ることのある時、その人は失敗したとて、とかくに利害得失のみに執着して、成敗を論ずる。若し利害得失にのみ重きを置いて人の成敗を論定したら、自ら手段の正邪、目的の善悪を輕視する弊風を馴致して、知らず〳〵の間に士道の頽廢を來すことゝなる。如何に富み且貴いからとて、その富貴が不正不義の手段によつて贏ち得たものならむ、卽ち不義の富である。若し之をも尚ぶなら、遂ゝ盜賊をも羨むことになる。

人の成敗を論じようとならば、その如何なる目的、如何なる手段に因つたかを攻究して、その是非善悪を斷定

斷定しなくてはならぬ
振舞うて
出來ない
あらう
謳歌
よい
いはれる

しなくてはならぬ。人事は意外に出ることが多く、常に善からぬ事のゝ振舞うても、何時の間にか富み且榮える人がないでもない。又仁義忠孝の道を踏み外したこともなく、日常孜々として事に勵み業を勉めても、やはり不運で終世貧困の境遇を脫することが出來ない人もあらう。前者を成功者と謳歌し、後者を失敗者と蔑むのは、結果のみを見た妄斷である。

試に適切な例を擧げると、かの楠木正成と足利尊氏とは、孰を成功者とし孰を失敗者といつてよいゝ。或意味では尊氏が成功者で、正成が失敗者といもきるのである。けれども君國に對する臣子の分からいへば、正成は

殊勝の成功者で、尊氏は我等臣民の齒してはならぬ不忠者ではないか。こゝが最も注意せねばならぬ點で、蓋棺の後に定まる筈の人の値は、その贏ち得た結果如何ではなく、その目的及び手段の正邪善惡によることを知らねばならぬ。

齒す

ない。

蓋棺

知らねばならぬ。

かのナポレオンがチートルローの大激戰に失敗した時に、連絡が絶えて御方の動靜を知る術がないのに、依然として堡壘を死守した一驍將があつた。偶敵將が告げて「汝の大將は既に大敗してをるではないか。汝は何故に獨り孤壘を死守するか。」と言へば、「我は主將の命のあることを知つて、他を知らぬ。」といつて、堅く壘を守つて降らなかつた。然し敢なく御方の敗報に接して、さてはと敗殘の兵を收めて、辛うじて身を以て免れ、巴里に歸つた後、慰問者に向ひ、「我は名譽を除く外、一切のものを失つた。」と答へたといふことである。

死守

降らなかつた

敢なく

辛うじて

斯樣のことは、日本では毫も珍とするに足らぬ。日本の軍人は昔ゝから今日に至るまで、殆どこの覺悟を有たぬものはない。身を以て免れた段は敗軍の將には違ないが、單に敗軍の故を以て不成功者であると論ずるのも、決して穩當な沙汰ではない。

（澁澤榮一）

一三　北畠親房

亀鑑たり。
棟梁柱石
門葉
傳
建武元年は一九九四年

吉野朝の忠臣はと問へば、何人も直ちに楠木正成、新田義貞、名和長年等の名を數ふべし。この人々が忠節武勇の赫々として、萬世の亀鑑たること誰もは疑はん。されども文武兼備、識見高邁、眞に吉野朝の棟梁柱石ともいふべきは、北畠親房なるべし。この朝が吉野の山間にありて、天下を知らしこと五十餘年の久しきに亙りしことも、東に北畠の一族ありて伊勢、伊賀の封土に據り、西に楠木の門葉ひろがりて河内、和泉の舊壘を保ちしにをる。

親房は初め世良親王の傅たり。親王の薨じ給ひしによりて悲に堪へず、一旦髪を削りて退隱せしゃども、建武

赴き給へり。
小田も關も共に常陸にあり
正平九年は二〇一四年
逆臣の走狗
競はざり
兵馬倥偬
皇統の正閏

中興の日にいたりて再び出でて仕へ、後醍醐天皇に從ひまつりて吉野の奥に入り、義良親王を佐け參らせて、奥羽の鎮に赴き給へる途中、海上颶風に遭ひて常陸の海に漂ひ、小田の城に據り、關の城を保ち、心力盡し力を極めて、敵と戰ひしこと六年なりしかど、終に志を達することを得ず、再び吉野に入りて大政を佐けまつり、正平九年に薨じ給へり。

この常陸に在りし頃、世道衰微し、人心輕浮に、義を忘れて利に就き、正朝の天子をすてて、逆臣の走狗となり、南風の甚だ競はざるを見て憂憤禁ずる能はぞ、兵馬倥偬の間に筆を執りて、神皇正統記を著し、皇統の正閏を明

かにし職原抄を作りて、官職の由來を述べ、世人戒して
その嚮ふ所を知らしめ、選敍の濫にすべからざるを教
へ、永く範を後世に垂る。その子顯家、顯信また皆節に死
せり。顯信、伊勢の國司として先志を墜さず。その忠心
義膽皆親房教化の致す所
なり。

選敍すべからざり
死せり。
執れり。
よれり。

親房自署

徳川光圀の大日本史を修するや、統を神器の所在に歸
し、正を南山の巔に掲ぐ。幕府大權を執れる時、天下の人
關東あるを知りて、京師あるを知らず。この時にあたり
て尊王の義を辨ずるもの多くは大日本史によりき。大

日本史が西山公の卓見に成りしことを言を俟たざれ
ども、その論旨の根據とせる所は正統記にあること蓋
し疑を容れず。然らば王政復古の業、また親房の功に負
ふ所多しといふべきなり。

西山公は光圀俟たざりせり。
王政復古

一四　いにしへの文

明治天皇御製

いにしへの文見るたびに思ふかな、
たのが治むる國はいかまと。

物皆はかはりゆけども、現つ神
ひが大君の御代はそこしへ。

世戒すてて山に入る人、山にても

現つ神
とこしへ

（本居宣長）

いづち　ゆくらむ　ためさむ　まとゐ

尙うき時もいづちゆくらむ。
うき事のなほゝの上につもれゝ〳〵、
限ある身の力ためさむ。
埋火のほたりのどゝに兄弟れ
まとゐせし夜ぞこひしかりける。

（凡河内躬恒）

（熊澤蕃山）

（松平定信）

一五　自治の意

在（有）　自治制度　囑　喜んで

吾嘗て獨逸に在りし時、某元老院議官來りて、地方自治制度と農政とを調査せんとて、その助手を囑せられき。もとより後學の爲なれば、喜んで之を諾し、或時、某村に行きてその役場の所在を尋ねしに、村民によく知るもの

なし　訪うて　挨拶　嚴めし

のなければ、村長の私宅を訪うて、案内を請ひしに、折しも村長は不在なりき。乃ち家族に尋ねて、別に役場の設なく、一村の用事は專ら村長の私宅にて辨ずることを知れり。就いて之を觀んと欲すれども、主人は在らず。やや逡巡せる間に、村長は――歸宅か、出勤か、――飄然として至れり。その風體附近の畠に勞作せる儘にして、長靴は泥にまみれ、衣服も襟なしの作業服、手には農具を提げ、來りて吾等を見るや、いと怪しげなる樣にて挨拶して、一室に案内したり。

「吾等は日本の官吏、貴國の町村制度調査の爲に參觀す。」といへば、町村自治制度などいふ嚴めしき文字は殆ど

簿（薄）
如し
處理
あるべし
羨望

心得ぬ顔つきにて、わが村の用はかくといひながら、徵稅戶籍等の帳簿を棚より取り下して一覽せしめたり。この事はいかに處分し、かの件はいかなる手續を要するかと、わが國の役場にて取扱ふ事項に就きて尋ぬるに、その十中の七八は、更に解せざるが如く、「かゝる事件は村民各自に之を處理す。」と答ふる程にて、吾等はその事務の甚だ簡單なるに驚きたり。思ふに制度の上には助役も書記もあるべけれど、格別の用もなかるべく、村會なども恐らくは木蔭の夕すゞみを兼ねて、立話にてその議を決すべし。無論給仕もなければ、小使も居らず。かくてこそ眞に自治なれと、羨望の念に堪へざりき。

官衙
反復
治る、治む
治む、治る
治者
化す
被治者

後十餘年、韓國に旅行し、群山附近なる郡司の役所に立寄りしことあり。その官衙の入口の上に、「自治」と題せる一面の額麗々しく掲げられたれば、通譯を以てこれは何の意ぞと尋ねたるに、郡司は「これは自治と讀む。」といへるのみにて、その他を說明せず。幾たびも問を繰返せども、同じ答を反復せるのみ。「吾未だ支那の熟字は知らざれども、この字をわが國ぶりに訓めば、おのづから治るとも、みづから治むともいふべし。貴公は何れの意に解釋するか。」と詰りたれども、尙これは自治なりといふに止りて、更に一歩をも進むることなし。「おのづから治る自治ならば、治者は無爲にして化し、被治者は無爲に

化せらる

完備せざるべからず

同じ

楚越

して化せられ、政治は天に任せて彼も此も終日安閑として晝寢して事足らん。然れどもみづから治むる自治ならば、是ぞ容易ならざる業務にして、人民も役人も各、日夜心身を勞して、諸般の制度を完備せざるべからず。貴公果して如何とする。」郡司答へて曰く、「これは前代の郡司より傳へられたる自治の額なり」と。名の同じきより之を觀れば、彼も自治なり、此も自治なり、實の異なるより之を觀れば、肝膽楚越なり。自治にも種類のあるものなりけり。

（歸雁の蘆による）

一六　朝顔を贈る

素人

上首尾

瀏覽

清楚

南風匂ひ中のお少年を偷みて春宵戴月の新を培養致す素人の手際としては無の上首尾なる方法なれども未だ知れず　瀏覽に供へ奉る時の草を匂ひて清楚なる花に優るものあるべしとも思へども　花の姿に於ては遂に馨香に及ばずと雖も　清楚の點に於ては風情に優らずと雖も色彩は之なるべく素面にて之を彩の業とせば何ぞならずと雖

松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮（白氏文集）

室鳩巣

心ともがな

ゆるく

重苦し

（三又書翰）

一七　暴風雨

ゆるく坂になりたる丘の頂に立ちて眺むれば、裸麥みのりたる廣野は、さながら黄金しろがね色映えかはす海の如くうち連れり。

されどその海の面には小波もたゝず、重苦しき空氣は

蒸熱し

黯黯

おどろ〳〵しく

萬象恐し

近く

しふねく

青黑し

いひ知らぬ

疾く

そよとだに動かず、大嵐將に來らんとす。

わが立てるあたりには、蒸熱き日の光くもりながらも猶照り輝けど、麥畠のあなたさまで遠からぬ所に、黯黯たる一團の風雲たどろ〳〵しく地平線の半ばを覆へり。

天地森閑……萬象悉く最後の日光の恐しき一睨に屏息し、一鳥啼かず、片翼飛ばず、群雀の影だになく、唯あたり近く牛蒡の廣葉をふねくはためく音のみぞ聞ゆる。』

垣根に生ふる蓬の香のいちじるしさよ。われはその青黑き叢に目を注ぎぬ。わが心にはいひ知らぬ不安の思あり。來れ、疾く來れかし、鳴れや雷、光れや稲妻、騒げ、注げ、

凝滯

雲よ、雨よ、いざ疾く凝滯の苦悶を拂へかし。

蒼冥

されど雲は動かず、沈々たる大地を壓して、依然として垂下し、いよ〳〵廣ごり、いよ〳〵黑みゆくのみ。唯見る、一色蒼冥のうち物ありて、一片の白布、一握の雪塊の如く徐かに飛び翔るを。ふは一羽の白鴿の村の方より飛びくるにてありき。

辛く

鴿は一直線に進み〳〵て、森のうちに沒し去れり。數分時は過ぎぬ、天地尙慘として聲なし。

低く

今や嵐は來れり、沈默は破れたり。われは辛くも家路を辿りぬ。風は怒號して縱橫に馳突し、雲はきれ〴〵にちぎれ〴〵て低く地に舞ひ、物皆撲

瀧つ瀨

ち合ひ、轉がり合ひ、篠つく大雨は、瀧つ瀨の如く、立木の幹を流れ下り、閃々たる紫電人目を眩し、轟々たる迅雷砲聲を欺き、虛空には硫黃の臭滿ちたり。

一八　果物

夏の初は、青梅こそ心地よきものなき。青葉の繁れる枝よ眞青の實の珠をなせる、美しといふにはあらねど清清し。

サクランボの涼趣は、全く青梅と相反す。青梅は二三顆小皿に盛るによろしく、これは累々數十顆を盤にし、光彩陸離たらしむるに妙あり。

正岡子規は明治の俳人

詩史

「林檎食うて牡丹の前に死なん哉。」子規の此の句歿前四五年頃に成りしものなり。水菓子の詩史に子規の名を逸すべからず。苹の味必ずしも梨を壓するに至らず。然れどもその大にして美なるは、津々として詩趣を生ず。詩人の食物とすべきは苹なるべし。苹は舊日本にはなし。その味にも亦新日本の特調あり。芭蕉、蕪村に梨の味ありとせば、子規の句には自ら苹の味あるを覺ゆ。

與謝蕪村は德川時代の俳人

拂底

人の未だ夏に馴れず、水菓子の拂底なるとき、夏橙市場に出づ。風貌堂々殆ど八百屋の店頭を壓す。帝都の人は葉陰に薫れる夏橙を知らず、濃綠の葉の繁れる枝に、此の實の金色に輝く夕、庭に水打つて月の昇るを待つ、這

這般

般の涼趣片田舍の特有なるべし。夏橙は見るばかりにて涼味あり。その肉味の美なるものほど外に光澤の麗しきものあり。夏橙の本場は長州なり。松下村塾を環りて夏橙の薫ずるあり、松陰先生は夏橙の畑の草を拔きつゝ、門人に歷史を語り聞かせたり。

松下村塾は長州にあり、吉田松陰の家塾

新體詩

バナヽと鳳梨との詩趣は、新體詩のものなるべし。此の兩者舊日本になし。その詩趣も舊詩歌に求めがたし。東洋に於ける果物の、文學に最も豐富なるは桃なり。而して桃太郎に至りてゝ、則ち御伽噺の國民的あるものなり。

御伽噺

芭蕉の句

舊套

「枯枝に烏のとまりけり、秋の暮。」の一句能く俳壇の舊套

道破

を道破す。而して此の句を想へば、秋晩の寥天萬木凋落して、紅柹ぢかり枝に殘れる畫趣眼前に浮ぶ。吾輩は柹を推して日本の果王とするに躊躇せず。甜美にして豐滿なるその肉、黄葉の疎らなる大木に紅く熟したる、食ふべく畫くべく、古來果物の第一なり。柹は枝を添へたるがよし。小く圓きものゝ殊に枝を重ねて山のみやげとするによろし。

添ふ

燃ゆ

ふちごは極めて心地よきものなり。彼の紅玉の燃ゆる中より涼味の湧きいづるこそ殊に面白けれ。これを玻璃皿ょ盛りて、純白の砂糖をかくれば、滿開の紅梅に曉雪のふりかゝれる趣あり。

湧き出づ

玻璃

神往

堪ふ

甲州は葡萄の國なり。「月の雫」の一語、人をして神往に堪へざらしむ。山に水晶あり、地に月の雫あり。吾が輩未だ甲州を見ざれども、東海道の富士川を渡るごとに、水源なる美しき國を想像す。藤棚と葡萄棚とは屋外にあるべき家庭の棚ならずんばあらず。藤ゝ白花をよろしとし、紫ゝ葡萄に讓るべし。葡萄棚を茶の間の外に築きて、その下かれる房に夏の風を樂しみ、秋の月を迎ふる、亦清き樂なり。

ならずんばあらず

迎ふ

柘榴は花も葉も餘り引立たず。唯その實、日本畫によろしく、油畫によろしく、之を盆栽にして花よりも畫趣あり。柘榴の小粒は極めて美し。その味も亦清冷、仙味第一

たるべし。

一九　十年前　その一

（原文節略、横山健堂）

若し
長し
大いなり
なし
なつかし
見たし。
めゝしく

首を回らせば、はや十二年の昔となりぬ。余が高等中學校に通ひて、年猶若く、身猶もこやかに、行末遙に長く、希望いたづらに大いなる頃の夏の事なりき。學年試驗は過ぎて、六十日の休暇は長けれど、山水を跋渉して自然の文を窮めんには、旅費を得る途なく、なつかしき故郷に母の笑顔を見たきは山々ながら、歸省は二年ぶりと定められて、去年歸りたれば、さすがにめゝしく今年もとは言ひかねつゝ、麻布の知る人を賴みて、その家の

嬉し
烈し
珍し
きたなし
面白し

二階に一夏を送るべきはかりごとをなしぬ。

居ること十日あまり、忽ち嬉しき恩命は下れり、若君の日光漫遊に伴せよとの事なり。夏服一二領急ぎとゝのへて、雨風烈しき朝上野に向へり。君に伴したる人は、余と共に三人、皆年長けたる人なり。汽車宇都宮に着けば、こゝに一宿に。

翌日晴天、馬車を驅りて行く。尋常一樣の旅行ながら、一月四圓の下宿の外に天地あることを知らぬ余には、汽車の上等も珍しく、旅籠の上等も嬉しく、きたなき馬車ながら借りきりの旅も面白し。まして旅行ずきの余には、尋常の山、尋常の水、尋常の野も、始めて見るものは興

ゆかし
冷し
をかし
禁へがたし
快く
脱ぎあへざるに

を催さざるなく、尋常の並木土手も、松が杉と變りて、こより昔の日光領と聞くもゆかし。立場に馬車を停めて、泡ふく馬に冷き水を飲ますれば、茶屋の老婆が缺盆に澁茶を載せて、吾等に侑むるもをかしく、壯心勃々として禁へがたき余には、木の根、石の角に乘りかけて躍りあがる馬車の、數〻乘手をはね落さんとするさへ、いと快く感ぜられたり。

旅人をのせたる馬車や、夏木立。

日光に着きて、旅店の樓上に汗臭き衣も脱ぎあへざるに、沛然たる驟雨屋を鳴して到り、やがて今市の方へ過ぎぬ。樓は南に向ひて開き、山は百歩の外にあり。雨の降

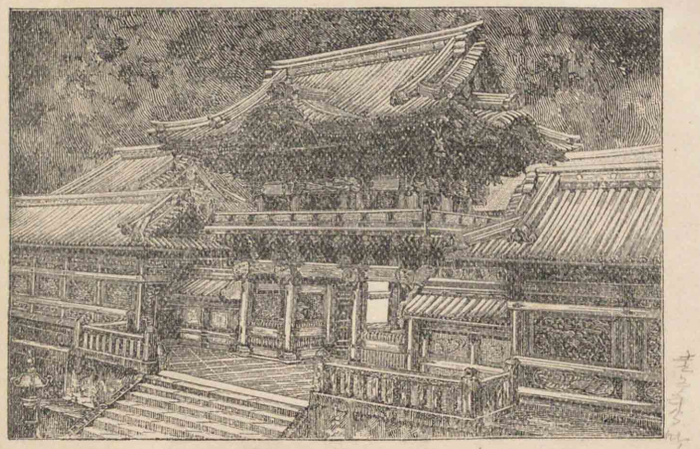
暗し
明るし
惘然
鮮かなり
高し
そゞろに
四望豁然
開く

る谷、日の照る峰、暗き森、明るき雲、奇景は一眸の中に集り、萬象は頃刻の間に變ず。惘然として眺め居たるに、雙眼鏡もてる人忽然として呼んで曰く、「見よ、左に見ゆる山の絶頂には一本の樹だになければ、眺望極めて佳からん、試に登らんか、如何」と。余直ちに應じ、共に旅舍の裏門より出づ。この時雲既に消えて、山色いよ〳〵鮮かなり。踊躍して登る。林盡きて道なし。人より高き茨の露を拂ひつゝ分け行けば、頭の上に當りて物の呼ぶ聲す。人か、梟か、鬼か、そゞろに身の毛はよだちぬ。やうやくにして絶頂に到り、草に踞して見る。四望豁然として開け、群山眼に在り。大谷川日光を出で、北を流れて野に入る、水

長う。
詣づ。
青し
赤し

光明滅して遂に判つべからず。一帶の綠樹長うして曲れるは、先に車を驅りし杉並木の道なり。半日の路程歷歷として、たかも人馬は辨ずべからぎ。

上州の山の夕立つ
けしきかな。



日光陽明門

次の日は東照宮に詣づ。天地すべて靑きうちに一條の赤き橋を架けたる畫景、萬株の杉三百年の苔蒸して、英雄の廟を護りたる奇觀など、余の心を動かさ

參差
金碧
こゝかし
黑し
濃し
靜かなり
淋しく
恍惚
はた
不可思議

ざるにあらず。されど堂塔參差、金碧相映ずる樣も、細工のこまかきと規模の小なるとには、意外の感あり。

一日中禪寺に遊びて、湖畔に宿る。中禪寺の湖は、一〻び余が目に觸れしより後、再び忘るべからざる地なり。黑きまで濃き山の綠、骨にとほりて靜かなる水の色、沈んで動かざる空氣、淋しく光る夕日、人跡を印せざる太古の苔、名も知らぬ不思議なる草花、凡そこれ等の奇異なる觀に打たれて、余は恍惚として佇めり。この時、夏もなく世間もなく、自己はた自己にあらず、忽然としてこの沈默せる萬象を通じて、不可思議なる一道の靈氣を感得したるが如し。

すゞし

月に水、すゞしき夕、神あらん。

二〇　十年前　その二

若君はその後余等と共に本郷の寄宿舍に住み給ひし

さへ、だに

ことさへありて、いと睦しく事へまゐりつ。御生れやさ

よろづ

しく、少しも人に驕り給はず。よろづに賢しく、よく物の

ことわり

ことわりを辨へおはすれば、御行末も榮え給はんとの

露と

み祈りしを、去年の夏はかなくも大磯の露と消え給ひ

にき。

えとぶらひもせで

君の御いたつきの由はほのかに聞きながら、病床に起き臥す身は、えとぶらひもせで、心うき日頃を經ぬ。遽に

あらぬかたは

だに、さへ

身まかり給ひぬと聞きて、遠からず御後を慕ひ奉らんとのみ思ひしが、今はと危ぶみし日も二日と過ぎ三日と過ぎて、纔に命ばかりはとりとめたれど、あらぬかたはとなりて、一歩も歩む能はず、立つことだに自由ならぬ身とはなりぬ。十年の昔、無限の希望を負ひて山水を跋渉し、殆ど一點の苦もなしに、未來の幸運を望みし時、誰か今日の境遇あることを期せんや。爾後、事は志と違ひ、身は仇と謀り、惡魔は天下の不幸を擧げて余の上に攢め、苦痛は全力を盡して余を試みんとするが如し。今や余はこの境遇に處して、安心の地を求むるに怠らずと雖も、曾遊を懷へば、うたゝ心を惱ましむるものなき

期せんや

今や

曾遊

うたゝ

にあらず。中禪寺の湖神は今尚余を俟つや、否や。魂、飛び、夢通ふ涼風の曉、月明の夕。

（正岡子規）

俟つや

二　華嚴瀑

瀑見の茶屋を左に見て、白樺、榛、山毛欅の林に入れば、晴れたる空の日ゝ暖に、白雲徐かに動いて、鳴く鳥、聲幽なり。白馬を驅る金髪の婦人の飛ぶが如くに消えたる後は、寂寞たる深山路、人跡全く絶えて、唯華嚴の瀑聲を聞くのみ。

動いて

消えたる

絶えて

某の翁が草わけして開きたりといふ、一軒屋の前より、谷底に下る小徑をたどり、一歩々々に吸ひ込まるゝかと思はるゝ細き峽間を傳ひ〳〵て、木の根にたより、岩角にすがり、下に〳〵と降り行く。道は太鼓の如く圓き巨岩に沿うて危く曲り、朽ちたる木多き上を越して、又降る事五六町、右手に韆然として瀉下する一大瀑布を見る。白雲瀑と記したる建札も、雨露に暴されて、文字は消えたり。瀑の前に吊橋を架す、鵲の橋といふ。橋の上より仰視すれば、紅葉枝を飛瀑の上にかはして、秋の眺はこの所に盡きたるかと疑はしめぬ。

傳ひ〳〵て

沿うて

韆然として

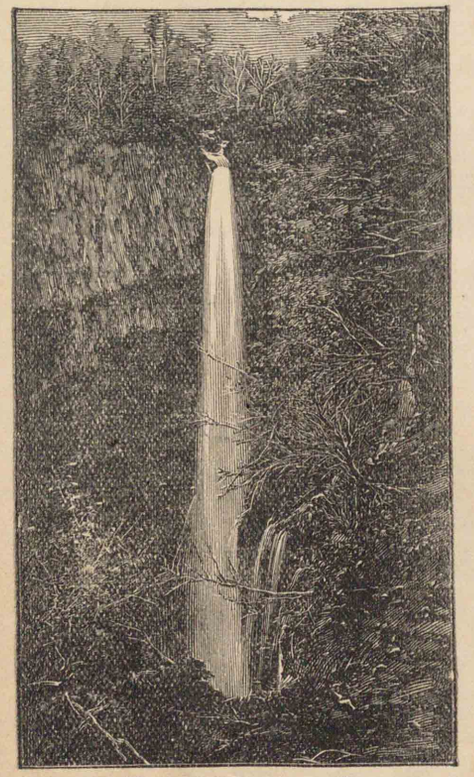
吊橋

突兀たる棧道

此より岩石突兀たる小山を登り又降り、棧道を過ぐれば、絶壁に臨みて、赤き毛氈敷きたる小き賣茶店あり。見上ぐる正面の絶壁は、岩石盡く逆さまに削られて劍の

蕭條として
天柱
地軸
偉大なる自然
大觀

如し。晩秋の風蕭條として毛髪を吹くところ、飛瀑七百尺、雪白の天柱、地軸に徹れと中天より衝き下り、崩れて雲となり、雨となり、霧となり、煙となる。風聲瀑聲交、起つて、百雷頭上にはためき、山搖き、地震ふ。偉大なる自然、嗚呼誰かよく之を描き、誰か能く之を傳ふるものぞ。



華嚴瀑

凄じくも美しき自然の大觀、吾等旅畫師は如何にしてこの色彩と情景とを描くべきか。自然の色は白けれども光あり、暗き中には深みあり、千差萬別なる岩の色、瀑布の色、深潭の色、飛躍する水、沸騰する飛沫、盡く蘚苔を帶びたる四面の山、濡れたる草、腐りたる巨幹。加ふるに一道の日光は強く斜に幽谷を照して、濛々として立ち升る雲霧の中に、七彩の長虹を描くに非ずや。吾等は徒らに思ひ惑ひ、呆然として筆を落しぬ。嗚呼哀なるは吾等拙き自然の摸倣者なるかな。

（日本名勝寫生紀行）

沸騰
蘚苔
濛々として
呆然
自然の摸倣者

本文は樹山が役儀御免の願書を節錄せるもの
打擲

二三　渡邊崋山

私十二歳の時、日本橋邊通行仕候節、忘れも仕らず、備前侯の御先供に當りて打擲を受け、子供ながらも大息仕

率ゐる

天分

祐筆合口

爽鳩

餘裕

候は、右備前侯も御歳は大體同年位にて、大衆を率ゐて御通行被成候事、天分とは申しながら同じ人間なるにと、發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來可申と存じ、その頃高橋文平と申すもの御祐筆を勤め候が、私子供には候へども合口にて候間、これに相談仕り、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成可申と決心仕候。さりながら私父二十年來の持病にて、一日も看病按摩仕らざる日は無之、これを奉公同樣に心得、母の手だすけ仕候。その上兄弟皆幼少にて、七人程も有之、唯母の手一つにて、病父も私共もその日を送り候事故、右樣の餘裕も無之、貧窮は筆紙の盡す所には無之候。

出家

生き別れ

見も知らぬ

蒲團

依之弟共は寺へ奉公に遣し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣し候。一人の弟は私十四歳ばかりの時、板橋まで生き別れに送り參り候時、雪はちら〳〵ふり來り、弟は八九歳にて、見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き振向き別れ候むし事、今に目前に見ゆる如くに御座候。

渡邊崋山

私母、近頃まで、夜中寢ね候に蒲團夜着を引きかけ候を見及び不申、やぶれ疊の上にごろ寢仕り、冬は火燵にふせり申候。私父大病故、高料の藥種藥禮、日々の麵類等に

事かき、疊建具の外大抵質物に置き盡し、尚親類共にも借財し盡し、僅か南鐐一片の儀にて、母方の身内のもの の本所一ッ目に住居し候方へ、母事助右衞門と申す弟を背負ひ、雪を冒して罷越し、夜に入りて歸宅仕候。その節私洗足の湯を沸し候とて、衣服を焦し、大いに叱られ候儀、今に覺え罷在候。

依之尚高橋文平に相談仕候に、とても儒者に相成候とて金のとれ候儀は無之、貧を救ふ道第一なりと申すにより、十六歳の時、爽鳩先生を賴み、芝の白芝山と申す畫工に入門仕候。然るところ貧人にて附屆不行屆なりとて、僅か二年にて師家より斷を受け申候。私もこの時は

とる

附屆
不行屆

金子金陵教へくる調ふ

七つ時は今の午前四時

谷文晁

起く

如何仕るべきかと泣きしづゝ候が、父の申候につきて、金陵の弟子と相成候。金陵ことの外憐みて教へくれ候間、少々は畫も出來候樣に相成候へども、半紙を調へ候手段無之、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、これにて紙筆を求め申候。學問は仕りたく候へども、何分閑暇無之、冬に相成候へば、朝七つ時に起き出でて、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候。右は文晁など私を憐み、畫道取立てくれ候節、彼人毎日拂曉に起きて畫を認め候咄を承り、奮發致候儀に有之候。

私二十六歳の正月元日、朋輩うちより候節、私申候は、上かくの如き御困難なれば、各方も拙者も今より心がけ、

佐藤一齋

猶豫

挫く

安堵

御政道を佐け可申と契約致候。依之一齋にも申し談じ、學問仕度候へども、寸暇も無之、夜中にても參り可申と存じ、父より門限御猶豫の儀願ひ候處、聽き屆け難き旨の御沙汰につき、終に折角の志も挫け申候。つら〳〵存候へば、上にして君に忠、下にして親に孝ならん事、皆學問の力により候。わけて御政道に與りて、上に忠ならん事、無學にては叶ひがたく候へば、愈、繪事を專らとして窮を救ひ、少しにても親に安堵せさせ申度と、これより は一生御役儀相勤め候はんとは思ひ寄らず、急にして は家の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成申すべき一事に、思を定め申候。

（英傑偉人渡邊崋山による）

精を竭し神を凝す

自暴自棄

價値

商量

一番槍

二三　一歩にても

端艇競漕にせよ、競馬にせよ、或は徒歩競走にせよ、第一着の望ある間は、誰も精を竭し神を凝して競爭すれども、その望の外れたる場合には、頓に態度を一變して、自暴自棄の擧動をなすものなきにあらず。これ第一着の勝を得ざれば、その他は爭ふべき價値なしと思へるが爲なるべし。果してその價値なきか、精細の商量を要す。一番槍の功名は、何人も名譽とする所なり、されど一番槍以外には爭ふべき餘地なきか。二番槍もあるべし、三番槍もあるべし、乃至四番、五番、六番もあるべし吾人は

壯語
最善は稀有の獲物なり

固より一番槍を理想とせざるべからず、されど之を得る能はずとて、すべての働を中止すべしといふ理由焉くにかある。一番槍に比すればこそ二番槍は劣りたれ、三番槍に較ぶれば尚一着の勝にあらずや。三番槍以下順を趁うて、何れも前述の比例を適用するを得べし。最善を得ずば何をも得る勿れとは、如何にも英雄らしき壯語なれども、凡そ人生を誤るものこの語の如きはあらじ。最善は稀有の獲物なり、何人の手裡にも、如何なる場合にも、必ず之を得べしと思ふべからず。然るに之を得ずば萬事を放擲すべしとせば、働く者は一人にして、遊ぶ者は千萬人ならざるべからず。これ天下の人を

六合
極端
面倒
如意不如意
直截

驅りて自暴自棄の深淵に擠すものにあらずや。之を舒ぶれば六合に漲り、之を卷けば懷に入るとは、支那人の口癖なれども、世の中の事はかくの如く極端より極端に走るものにあらず。人事は意の如くならざると同時に、又意の如くならざるにもあらず。人事の面倒は、その如意不如意の釣合若しくは程度の問題に過ぎざるなり。故に若し意の如くならざる限は何事をも行はずとせば、初より何事をも爲さずと覺悟するを以て寧ろ直截なる決心と謂はざるを得ず。

蓋し一切の人事は程度を以て支持するものと謂ふべし。國家の大より個人の小に至るまで、一として程度な

少し
焼け腹
悔ゆ
爲、成
成爲

きはなし。善にも程度あり、悪にも程度あり吾人は固より一躍して理想の境に達せんことを欲す。されど若しその難きを知らば、せめて一級にても二級にても、階級を登り行くべし。少しわが意に滿たずとて、何事をも乍ち放擲すること、俗語に焼け腹といへるが如きは、決して成功の道にあらず。世上幾多の俊才が一蹶して振はざる所以、一はこゝにあり。一歩にても、半歩にても、吾人は現状より進むを要す、進歩の遲々たるは、必ずしも問ふ所にあらず、何事も思ひ立つ日を吉日と定めて孜々として進むべし。若し晩き迄悔いて爲す所なくんば、畢生竟に成す所なからん。

（德富蘇峰）

載す
降る
過ぐ
任す
感ず

二四　人生は汽車

汽笛一聲夢を載せて帝都を出で、五十三次睡裡に過ぐ。人生も亦汽車に乗るが如きか。その初め乗る時客山の如し。謂へらく次驛に於て大いに減少すべしと。既に次驛に達すれば、人少しも減ぜず。又謂へらく此の次に於て減ずべしと。一驛又一驛降るものあれど、又乗るものあり。漸く名古屋を過ぎ、京都に來りて客大いに減ず。されかも身もまた此處に下車せざるべからず。今年思ふに任せず、來年必ず幸福あらんと。一年又一年、希望を迚りて纔に生活す。其の漸く安樂を感ずる時は人生五十既

辭す
夷險
避く
欲す
後る
人生は逆旅の如し
悠遊

に過ぎて、身もまた世を辭せざるべからざる時たり。佐藤一齋嘗て曰く、「人の世を渉る、行路の如し。途に夷險あり、日に晴雨あり、畢竟避くるを得ず。唯宜しく處に隨ひ時に隨ひ相緩急すべし、速を欲して禍を取ること勿れ。猶豫して期に後るゝこと勿れ。これ旅に處するの道、卽ち世を渉るの道なり」と。人生は猶旅行の如し、生より來つて死に赴く。古人喩へて人生は逆旅の如しといへり。予思へらく、人生既に逆旅の如しとせば、人の營々として働くもの、これ宿料の支辨にあらざるなきか。彼の悠遊何の爲すなき徒は、卽ちこれ無錢飲食の輩のみと。

（加藤咄堂）

樽ひろひ
けふ

二五　名家の言

わけのがる麓の路は多けれど、　（失名）
同じ高嶺の月をこそ見れ。

雨霰雪や霙とへだつれど、　（失名）
たつれば同じ谷川の水。

物いへば唇寒し秋の風。　（芭蕉）

初雪や、いれも人の子、樽ひろひ。　（冠里）

けふになりて、菊作らうと思ひけり。　（二水）

來年は〳〵とて暮れよ〳〵り。　（露川）

こゝに擧げたる和歌俳句は概ね俗意俗情のものにし

て、詩としての價値は乏しけれども、なほその世話哲學の一片として、永く一般國民の間に喧傳する所以は、何人も久しく思惟し感得して、言はんと欲して未だ言ひ得ざりしことを、巧に言ひ現したるにあり。たとひ、高雅なる文學的作品たるを得ずとも、通俗なる眞理の一面を道破したる功は沒すべからざるなり。

訓誡の意を含みたる詩歌俳句が諺として用ひらるゝのみならず、偉人傑士の語は直に當時の人口に膾炙し、永く後昆に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔、孟、釋迦、基督の金言の如き、いふも更なり、王彦章が「豹死留皮、人死留名」といひ、曹孟德が「既得隴望蜀」といひ、

喧傳
思惟し感得す
文學的作品
膾炙
伍を同じうす
いふも更なり
王彦章は支那五代梁の臣、曹孟德は魏の太祖曹操のこと

アレキサンダー大王が、波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若として「一屠兒千羊を恐れず。」といひ、シーザーが西班牙の太守に擧げられて赴任せる途次、アルプス山下の一寒村を過ぎ、「かくの如き貧邑にも亦邑長の職を爭ふ者ありや。」と從者のいへるに對へて慨然として「羅馬にありて人の下に立たんよりは、西班牙に於て人の上に立たん。大都の胥吏たらんよりは、寧ろこの寒邑の長たらん。」といひしが如き、家康が五字、七字の箴上を見よ。「身の程を知れ。」の如き、一度偉人傑士の口をいでしより、忽ち千萬人の間に傳誦適用せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が「和歌に師匠なし。」と敎へ、芭蕉

自若
寒村
胥吏
和歌に師匠なし

俳諧に古人なし

言ふは易く行ふは難し
能く言ふ者必ずしも能く行はず
言多きは品少し
口を守る瓶の如くせよ
思ふこと言はれば腹ふくる
口より出せば世間
駟も舌に及ばず
吐いた唾は呑めぬ

が之に倣ひて「俳諧に古人なし。」と唱へたるが如き、前數者に比して、通用の範圍稍狹しといへども、名人の一語が世上の諺となるに至りては、その揆一のみ。

二六　口腹耳目の箴

言ふは易くして行ふは難く、能く言ふ者必ずしも能く行はず、言多きは品少し、言行は君子の樞機なり、口を守ること瓶の如くせよと、古人も誡めたり。されど思ふことと言はぬは腹ふくるゝ業にして、あながちに沈默を守れとにはあらず。唯口より出づれば世間とて、弦を放れし矢の如く、駟も舌に及ばず、吐いた唾は呑まれぬものなれば、よく〳〵注意して悔を貽さざらんために、言ひたいことは明日いへといふなるべし。蛙は口ゆゑに蛇に呑まれ、雉も啼かねば人にうたれず。禍は口より出で、病は口より入る。良藥は口に苦く、甘きものは腹にたまる。腹八合に醫者いらず、フランクリンが十三條の自箴中にも、睡くなるまで食ふなといへり。腹の柔きは無病の徵にして、腹の皮張れば目の皮のたるむものと知るべし。

言ひたいことは明日いへ
蛙は口から
雉も啼かずば打たれもすまい
禍は口より出で
病は口より入る
良藥は口に苦し
腹八合に醫者いらず
腹の皮が張れば目の皮がたるむ
百聞一見に如かず
耳を貴び目を賤しむ

百聞は一見に如かず、聞きたるのみにては解りにくきことも、一目見てたやすく悟らるゝことあり。されど世にはまた耳を貴んで目を賤しむといふ諺もありて、傳

耳學問
盲の牆のぞき
寢耳に水

燈臺下暗し
息の臭きは主知らず
人の一寸我が一尺
耳を掩うて鈴を窃む
盲蛇におぢず

へ聞き、習ひ覺えし知識に泥みて、おのが觀察を疎かにする人なきにあらず。かゝる耳學問の輩は、實地に臨みて、盲の牆のぞき、寢耳に水の歎あるべし。されば耳より知識を入るゝと共に、常に目を明かにして觀察を怠るべからず。目は心の窓なり、窓暗くしては物を見定めがたし。燈臺は下暗く、息の臭きは我知らずとかや。人の一寸は見えて、わが一尺は見えぬ習なれば、身を省みて過を聞くことを喜ばざるべからず。耳を掩うて鈴を窃むは怯なり、盲蛇におぢざるは勇にあらず。己を知り、人を知るを聰明の士とはいふなり。

新羅三郎は源義光
起れり。
氣づかはし。
聞かじ。
丈夫
たゝずむ
かいくる

二七　新羅三郎

奥にふくさの起れるに、
兄の身の上氣づかはし、
餘所よ聞かじと、丈夫が
つかさも辭して、ゆく秋の
風に鞭うちはせくだる。
鏡の宿にたゝずめむ、
形に影のおくれじと、
手綱かいくり追ひ來る

縹の狩衣
豐原時秋
うつむきつ。
暮ふ
過ぎにけり。

楯を疊と

縹の狩衣、青袴。
「豐原ぬしか、いかにして。」
とかくはいはで、うつむきつ、
「なつかしければ、おん供」と、
とむるも聽かで暮ひゆく。
鳴海の千鳥、ひとやさき、
清見の關も過ぎにけり。
足柄山に駒とめて、
楯を疊と對ひ坐す。

あこがる
あはれさ
冴え上る
落つ

家の祕曲にあこがはゝ
深き心のあはれさに、
今ぞ讓れ、樂の道。
笙の音高く冴え上る
空に一輪月きよく、
光は落つる袖の露。
涙はらひてこれまでと、
東へ西へわかれゆく。

二八　浮島原の對面

佐殿は右兵衛佐源頼朝
見參
堀彌太郎
御曹司は源義經
頭の殿は左馬頭源義朝
ゆくへ。
おはす
配所
任す

佐殿は善悪に騒がぬ人にてたゝ〳〵けるが、今度ゝことの外嬉〳〵げにて、「さらばこれへたゝ〳〵まし候へ。見參せん。」と宣へば、彌太郎やおて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きによろこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つく〴〵とこれを御覽じて、まづ涙にむせび給へば、御曹司も共に聲を呑みて泣き給ふ。

互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙をたさへて、「さても頭の殿にたくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候ふ時、見奉り〳〵ばかりなり。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東、北條に守護せられ、心よ任せぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の

あはす
のぼす
かなひがたかり
御邊

由ゝ、幽に承りて候ひしかども、音信だよも申さず候ふ。兄弟ありと御忘れ候ゝで、とりあへず御上り候ふこと、申しつくしがたく悦び入り候ふ。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ、八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあゝする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身すゝみ候へば、東國おぼつかなし、代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし、他人をのぼせんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひおゝかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひゝるやうにこ

八幡殿は源義家
刑部丞は源義光

魚と水との如く

宣ひもあへず

大名小名

そ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の、後三年の合戰に、御弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にいのでかまさるべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。」と宣ひもあへず、涙を流〻給ひけり。御曹司はとかくの返事もなく〻て、袂をぞしぼられける。これを見て大名小名たがひの御心お〻はかりて、みな袖をぞぬらしける。

ちゐらくありて御曹司申されけるは、「仰のごとく、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひ〻が、七歳の時鞍馬へ參りて、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひ〻が、内々平家方便をつくるよ〻承り候ふ間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳せ參る。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候ふこゝちしてこそ候へ。身をば君に進らする上は、いゑゞ仰に從ひ參らせでは候ふべき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそこの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。（義經記）

かたの如くさては

頼み候ひつ。

進らす

大將軍にて

二九　源平二烈士

渡邊競は、源三位入道頼政が所從の士には第一のもの

治承元年は一八三七年
高倉の宮は以仁王

知らせざり。

せまほし

なかり

言はす。

貝鞍

罷り歸りぬ。

なり。然るに、治承中賴政高倉の宮をすゝめて兵を起し
し時、京師を發して倉皇として三井寺に赴きしが、打忘
れてやありけむ、競にかくとも知らせざりし程に、競し
ばらく猶豫して家にありしを、こゝに平の宗盛、日頃競
が魁偉なるを見て、己が所從にせまほしく思ひしが、賴
政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、今度競ひ
とり都に殘れりと聞きて、六波羅に參れと人をして言
はせければ、參りけり。宗盛對面して、「汝今より我に仕へ
ば、入道の恩にまさるべし。」とて、小糟毛といふ馬に貝鞍
置き、乘換の料とて遠山といふ馬を添へて賜ひけり。競
あしこまり、悅びて罷り歸りぬ。

入道

とり殘さる。

さ

馬上ながら

恩顧

一族家人等打ちよりて、「入道殿是程の大事をおぼし立
ち給ふに、獨りとり殘されしは遺憾なり。大將のかく語
らひ給ふも辭ゝがたし。『時の花をかざしにせよ』といふ
こともあれば、唯このまゝにてあれかし。」といふを、競「い
やとよ、勇士の義さはあらず。」とて、宗盛より賜はりたる
小糟毛に騎り、郎黨七騎打ちつれて、三井寺へとて打出
でしが、六波羅の門前を通りし時、馬上ながら門の内を
のぞきて高聲に言ひけるは、「競こそ唯今下し賜ひし馬
に騎り、三井寺へ罷り越すなれ。御恩顧を蒙りたれども、
三位入道の恩忘れがゝければ、この度死を共にせむと
す。御門前を空しく打過ぎむは本意なければ、御暇を申

討死してけり　平頼盛

いはす

召具せらる

すなり。」とて三井寺に至り、頼政と一所になりしが、その後宇治橋の合戰にいさぎよく討死してけり。

平宗清は頼盛の臣なり。平治の亂に頼朝幼少にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母清盛に乞ひて死を救ひけり。その時宗清朝夕に頼朝をいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝豫て頼盛に通問して、疎意なき由をいはせける程に、頼盛獨り一門に背きて都にとゞまりけり。その後平家未だ亡びずして西海に在りしが、頼朝舊恩を謝せんが爲に、頼盛を鎌倉に招きて、宗清をも必ず召具せらるべき由を言ひおこせあれば、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざ、つきて下らむ。」と言ひしに、宗清言ひける

なじみ　引出物　報ゆ　まします　あるまじ　尋ねられぬ　仰せらる　行かざり

やう、「頼朝某に下れといふは、定めて昔のなじみを思ひいでて、所領、引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報いむとの事なるべし。今更源氏に詔ひてその蔭によらむは西海にある朋友どもの聞ゝむ所も口惜し。君はかくて都に御安堵ましませども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜やすき御心もあるまじ。此處にて思ひやり奉るも痛はしくこそあれ。鎌倉に御越しありて、頼朝某がことを尋ねられなば、折ふし痛あるよしを仰せられて給へ。」とて行かざりけり。その後西海へ下りけるにや、その終を知らず。

（室鳩巣）

一朝一夕

公卿詩歌管絃

物質的文明興りしなり

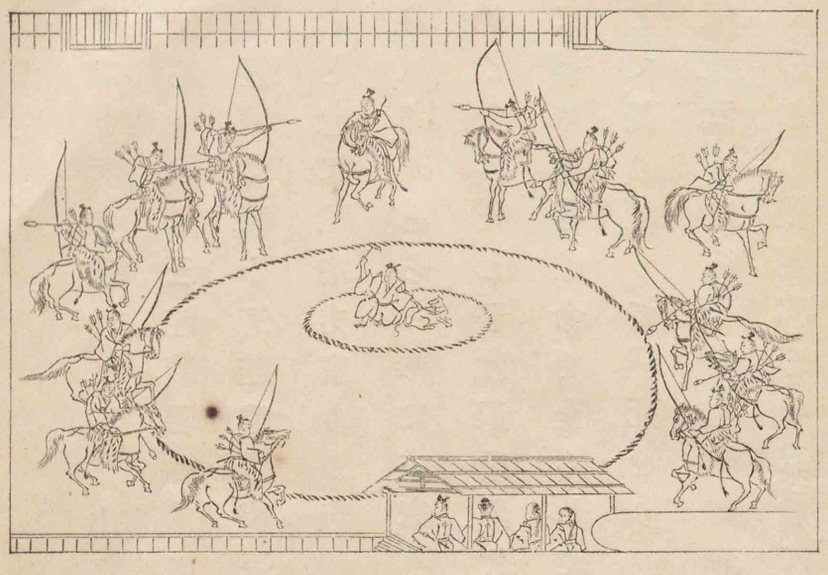
遁れしめたり

三〇　關東武士

東國の侍が、剛健の氣を磨き、素樸の風を尚びしは、一朝一夕のことにあらざりき。公卿は詩歌管絃に耽れば、武士は笠懸、犬追物を弄び、京都は文を以て立ち、關東は武を以て榮ゆ古の諺に「東八箇國を以て日本國に對し、鎌倉を以て八箇國に對す。」といへり。土地狹く、物質的文明の開けざりし鎌倉は、武士道の中心として興りしなり。』はじめ源頼朝の流されて伊豆に居りし時、豪族伊東祐親謀りてこれを殺さんとす。その次男九郎祐泰密に告げて難を遁れしめたり。さて頼朝の關東を定むるや、祐

囚人たるに

赦されしが



犬追物

親を捕へ、祐泰を德としてこれに報いんとす。祐泰辭して「父は囚人たるに、その子爭でか恩賞を蒙るべき。早く御暇を賜はるべし。」とて上洛して、平氏の軍に加りぬ。祐親もその壻三浦義澄の請によりて赦されしが、「吾何の面目ありて更めて頼朝に見えんや。」とて自

遭うて
家人なり
先途
卑怯未練

殺したり。

頼朝の兵を擧げて石橋山に敗るゝや、一時その所在をくらませり。三浦義明これに黨し、一族を率ゐて、相摸の衣笠城に籠る。河越重頼等平氏に附きて、これを攻むること急に、城中力窮りぬ。義明曰く、「吾歳既に八十九、餘命幾ばくかあらん。幸に主家再興の時に遭うて、悅これに如くものなし。吾は源氏累代の家人なり。今老の身を君に捧ぐ。汝等は命を全くして、御先途を見屆け奉るべし。」とて、獨り留りて戰死せり。

坂東武者の節義を重んじ、卑怯未練を恥ぢたること、かくの如し。頼朝幕府を鎌倉に創め、力めてこの風を維持

藤原俊兼
千葉介常胤
土肥實平
麁衣
郎徒
失ひき。
省みる
深かり

せんとして、質素を奬め、弓馬を練り、時に那須野、富士野に狩せり。又ある時、筑後守俊兼が美衣を着たるを見、卽座に彼の刀を取つて、その衣を切り、戒めて曰く、「常胤、實平等は學問もなき侍なれど、麁衣に甘んずれば、その家たのづから富裕にして、數多の郎徒を扶持す。汝は才幹あれども、儉約を辨へず、爲すところ甚だ過分なり」と。近侍の臣これを聞いて、皆色を失ひたといふ。

執權北條泰時は類少き名臣なり。常に「貧にして諂はざるはあれども、富みて驕らざるはなし。」といひて、自ら省みること深かりき。嘗て諸侯その意を迎へんとて、「御館の構の粗末にして不用心なるに、築地を築きたまへ。吾

就かせん
候はじ
仕ふべくば
從はしめし
雲泥の相違
大佛宣時

等御手傳仕らん。」と勸む。泰時頷きて、「御志は嬉しけれど、國々より人夫を上せて、役に就かせんことは、國家の煩なり。泰時運盡きたらば、鐵の築地を築くとも助り候はじ。運ありて君に仕ふべくば、これにて事足り候ふべし。」と答へたり。藤原道長が法成寺を建てんとて、百官に命じて、公務を廢してもその役に從はしめしとは、雲泥の相違といふべし。

その他、執權時頼の母の教訓といひ、時頼が一族宣時を招き、土器に味噌の殘りたるを肴として、半夜の歡を盡したるといひ、いづれも當時の武家の氣質を見るに足るべし。上の行ふところ、下またこれに倣ひて、鎌倉は京

異なり
一都會たりし
なり
吹きぬ
降り來つ
潑せる
黝然
如く

都と頗る異なる一都會たりしなり。

三一　海と岩

空は次第に紫色に濁りて、生溫き南風面を吹きぬ。漁師等が濱に走り出で來りて、忙しく網を收むる程に、雨はら〳〵と降り來つ。

雨はやがて止みぬ。風は彌、吹きつのる。眼を上ぐれば墨を潑せる、洋墨をほがせる、紫に汚れ、銀色に朧に、さまざまの態を盡せる雲滿天に染み、融け、渦まき、富士も天城もかくれぬ。凄きまで黝然と暗める海は、さながら丈夫の怒れる如く、千丈の底より鳴り吼えつゝ、一波又一波、

斷えず
韃靼として

名島は相摸三浦半島の西岸にある小島

つゞけたりき

岩を乘り越え、濱を呑み、斷えず、休せず、韃靼として陸を目がけて押寄す。

見渡せば海には一帆の影なし。唯大鷲の嘴をあげ、翼を張れるが如き名島の孤岩の、獨り大濤をかぶり、煙を蹴散しつゝ、屹として萬波の海に立つあるのみ。

あゝ海よ、爾の怒は偉大なり。岩よ、爾の意力は偉大なり。古の大人も曾て爾の如く天を仰ぎ、永遠を思ひ、一世を敵として孤高の戰をつゞけたりき。

風は猶止まず、海は益猛りぬ。千波又萬波、碎けてもまた寄せ來る。彼方の海上に斗出して、剛健粗朴褐色の衣つけて、一點の青を帶びず、悠然と腰をすゑて、攻め寄すうる。

相摸太郎は北條時宗

想はしむ

斜なり

似る

海に向へる小き岬を見ずや。人をして當年の相摸太郎を想はしむ。

（德富蘆花）

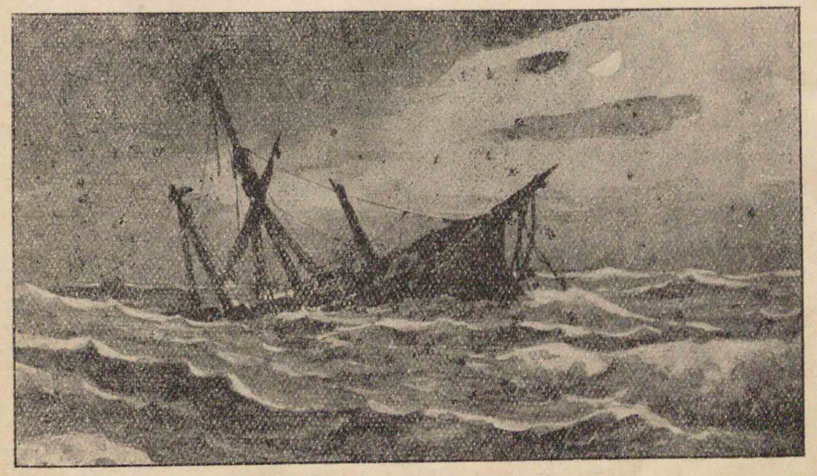
三二　破船

半輪の月斜なり、
地平線上雲黑く、
形さながら世を笑ふ
惡魔の影に似たるかな。
破船のへりを洗ひさりて
波はむなしく立ちかへる。

悲劇
名殘
すさまじ
自然

波また寄せてまた洗ふ、
折れし檣、やれし舟、
語るは何の悲劇ぞや。
叫喚の名殘たゞあらし、
月はすさまじ、あかばねの
殘れる數に青白う。

自然の力、波の力、
引きてしづめて海底に
ふたつの影を呑まんまで、
あばしも命か猶殘る、



あゝ破船の姿、波のこなた、
あゝ半輪の月、波のあなた。

（土井晩翠）

三三　古戰場

永祿三年（二二二二〇年）の事

わづかに

音す

千古の快男子織田信長、今川義元の大軍におしよせられて、びくともせず。この世の名殘の酒宴に一夜を明かし、はては起ちて舞ふ直垂の袖、ひかり輝きて、はや朝日は昇りぬ。

從ふものわづかに十騎なりしが、追ひ〳〵に百人加り、二百人加りて、今は千人となれり、路にて熱田の祠に祈るに、龕中に物の音す。ひそかに祠官に命じて、甲をなら

鷲津、丸根は共に尾張國にあり

義元の本陣は桶狭間（有松附近）にありき

さしめて、神慮なりとは、英雄人を欺くものかな。

ゆき〳〵て、三千騎は集りたれど、なほ義元の四萬五千騎に比ぶれば十分の一にも足らず。見れば鷲津、丸根の兩城に火盛んに起る。あはれや、はや陷りたるかと、將士のためらふを叱りはげまし、我に勝算ありとて、ひた馳せに馳す。

ためらふ

勝算

敵の本陣は今や眼下にあり。一呼してつきくづさんとすれば、恰も好し、雨至り、烈風起り、迅雷轟き、天地晦蒙、咫尺辨ぜず。信長眞先に進みしが、まづ敵の大將の幕に入りたるは服部小平太、斬らんとすれば、却つて膝をきらる。毛利秀高ついで進んで義元を刺し殺し、首を手にし

咫尺辨ぜず

滾々

我にかへれば

基墓

射る

天正三年は二二三五年

德川殿は家康

見えさせ給ふ

弱らせ給ふ

仰せおかる

て出づれば、暗雨の中にもしるく、鮮血滾々として滴る。』ふと我にかへれば、義元なく、秀高なく、信長なく、雷雨の跡もなし。一基の古墓、當年の名殘をとゞめて、寂寞として荒草の中に立ち、亂雲の中より射る夕陽の影、冷なり。

（天町桂月）

三四　本多重次

いにし天正三年三月、德川殿御背中に癰といふもの出來て、既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療、術を盡しゝれども、その驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等めし集めて、御跡の事ども仰せおかる。人々の周章いふに及ばず、土

覺えさせ給ふ

詮をしむ

民百姓等に至るまで、その程々に從ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

その時、重次御枕に取りつきて泣く〳〵申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ふべし。重次が昔この病をうけしに、たち所に驗見せし良醫の候ふ、彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す。はの上、醫療その詮なし、且は命ををしむに似たり。」とて用ひ給はず。重次大いに怒つて、「かほど大事の腫物かろがろしく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治せしめまゐらせんとするをも用ひ給はで失せ給はん事、御心がらとはい

あつたらし

驚かせ給ふ

仰せらる

えこそ止めぬ

大人し

まゐる

ひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつての御供かなふべからず、さらば御先へ參らん。」とて御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出でて引き止め、「仰せらるべき旨候ふ。」といふ。重次聲を怒ら〳〵て、「最期の暇乞ひて罷り出づる者を、見苦しい殿原の止めやうや。」と罵つて出でんとす。

「されば候ふ。その人を止めよとの御使に、えこそ止めぬと申せとは、大人しくも候はぬ本多殿。」といはれて、「げにさも候ふ。」とて御前にまゐる。

犬死

徳川殿「汝は物に狂ひてかくはいふか。たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼にこそ死すべけれ。又汝も、如何にもして一日も世に殘りて、若き者ども掟して、わが家の絶えざらん樣を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いやいや、それは人に依つての事に候ふ。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供その詮なし。重次若年の昔よりこゝかしこの軍に從つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは重次一人に集つて、世に交らん事叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては、人に恐れも敬ひもせられつれ、殿なくならせ給ひなば、他人までも候ふまじ、まづ御聟の北條殿わが國々を取らんとし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ちに別れて、氣おくれし、はかばかしき矢の一筋をも射出す事叶ふべからむ。當家の亡びん事また踵をめぐらすべからず。重次それまでながらへて、『あの年寄りたるかたは者は徳川殿の譜代にて、なにがしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なればかく世には恥を曝すらん』と、うしろ指さゝれん事、老の恥何事かこれにすぎ候ふべき。この頃までも、武功の家の人御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を

なくならせ給ふ。
北條殿は氏直
久しう。
はかゞし
踵をめぐらす
譜代
家人
うしろ指さゝる
さらぬ人

あさまし

ことわり

任せられん

召さる

屈めしを、世にもあはれに思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候ふと存ずれば、殿におくれ參らせんが悲しきばかりにも候はず、わが身の果もあさましきに因つて、御先に死する事にて候ふ。」と申す。

「汝がいふ所ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を見んとも、一日も生き殘つて、後の事よきに計らふべきか、いかに。」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰をや背くべき。」と申す。

「さらば醫師召せ。」とて召さる。醫師やがて參りて、「御灸治

明治四十一年九月廿八日印刷
明治四十一年十月二日發行
明治四十一年十二月十日訂正再版印刷
明治四十一年十二月十五日訂正再版發行
明治四十四年十一月廿一日修正三版印刷
明治四十四年十二月廿四日修正三版發行
明治四十五年二月八日訂正四版印刷
明治四十五年二月十一日訂正四版發行
大正元年八月廿五日修正五版印刷
大正元年八月廿八日修正五版發行

新體國語教本
訂正
毎卷定價金貳拾六錢

著作者　故　藤岡作太郎
訂補者　藤井乙男
發行者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　西野宮
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　吉田
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　開成館　長谷川
【振替貯金口座】東京第五參貳貳番
西部販賣所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎

著作權所有
著者
檢印
不許轉載

（博文館印刷所印刷）